

日  
間  
瑣  
錄

五

大正十四年六月中浣起筆

特 別  
14  
1919  
373



日間瑣録

大正十四年六月十二日起筆



○画家中林竹洞と自著自跋の書が三四種ある中、  
 多くは知られてゐるの、(西遊)金剛杵は、其外、  
 稀に坊間に出る。知余記、清白集ハヤ、  
 前年手に入れたが、知余記ハ竹洞の人生観ともなる。さ  
 ら、清白集ハ和歌や詩の集、最も稀なるもの  
 あり。此外、今一種ありとせば、  
 知余記ハ心の、  
 と題したる書は、  
 免るもの、  
 あり。竹洞研究より、  
 此著を材料として、

竹洞が唯此の畫家であることが北野の著をよめば  
知れるのである。

○前巻に「拙解」の語を重んずる處が千々入つたを  
其の大意を録しておいたが、えんて似江よあを更ら  
ず得た、そんハかくんざと、六張うおれど  
を雅文と書いたもので、文政十年五月武蔵川紙  
下石井の里檀亭主井上淑蔭の著也、  
首二井上文雄の序と白檮舎藤原政之の序が  
あ、舌切雀のことを扱つてあるもの三四種  
あり、巻尾に「拙解」の語を重んずる處が千々入つたを  
知れるのである。

○神保日年より、此の語を重んずる處が千々入つたを  
知れるのである。

一、来りて、その時代を、  
ある、その心を、  
其の傳は、  
と示す、  
このあり、  
一、かくんことを、  
加へ、  
い、  
努力す、  
回、  
一、  
托す

六月十一日記

○昨のちの祇田の法を石を過り二三の回を獲り

一 佚存書者

三十冊

上海館刷本あり、此者林述高が支那に逸  
し、日本に存するものを刊し、そのもの  
ハ原本強き得たがし、前身支那の霞  
刻也、ことあり大なるし、七面向からる  
このろし、此上海本、字書にて修め  
るものるん、存するの面目を存す、佚存  
の二字、改陽永叔の日本刀歌に、往福  
行時、経未焚、佚書百篇、今尚存、の句  
に取、唐宋の逸書を刊し、そのもの也

原を獲易からるを以て、今、此の刷  
本を繕ふ

一人帖

五帖

此法帖初めを元日不考、支那の西遊に  
一人の遺、尚を輯めて墨筆帖と  
すもの也、世に文正公文天祥より始  
志節の士遺墨多く傳り、嘉慶の  
改也、貴人帖と書名を名くる不、凡  
止、以書名家者不異、馬、於、者、以、人  
者、帖、不、以、書、為、帖、其、書、正、其、人  
也、と、鐵、保、の、跋、あり、續、帖、を、才、五、冊  
とす

大同類聚方

一冊

此方世に流布するもの偽本ありと云ふことあり、  
新撰の真本は是なり、其本は、  
院に著し花の字あり、原本の版  
本今存し得ずと云ふ、此方の原本を  
鉤勒模刻し、今も也、携うる一巻  
のみ刊せり、空をなすと云ふも、  
の面目を覚え、公体指行草十三  
体と号ふ、巻子、今も公体を異にし  
たりと云ふ、携ハ天平の字宛と見  
る、思ひあり、昔ハ高海の字に似たり、  
延正十一年の旨といふ、典義未察の

十二行

一 備急八葉新論 奇魂附録

三冊

印あり、極心に、勢威花の目三字を  
刻す、版式丹勢世著者下、似し、  
勢威の二字丹勢試と近かき加ふと  
人、或ハ丹勢書出、中、の、の、を、と  
七、九、十、ハ、府、佐、藤、威、の、刻、す、  
所、る、こ、と、別項の、目、書、の、末、尾、に、あ  
る、用、紙、と、う、知、る、と、藤、田、池、谷、東、湖  
の、遺、者、中、に、あ、り、し、と、云、現に、口、書  
ハ、東、湖、の、著、也、

奇魂性、坊、子、の、事、也、此、方、長、く、携  
し、亦、三、行、教、神、符、湯、の、著、す、不、即、ち

静儀也此者の欄心も静儀花の三字  
 を刻す、卷中九葉の回あり、卷尾に  
 ハ葉新論異をも収め、何故か此條の  
 必活字本也、其正年間の上様とす

○此の回古假協台証儀欠をを麻希の南葵又存本の  
 なる所不に(重き)加修載の也、傳命を来月の七日辰  
 くにハのこいゝ事、其の協誠を凝らして、ある壇と  
 加へ、古書をもかき入る言、其の心、故彦が又つか  
 ら心儀を古書あり、言、是れが協とありし、其意か尋  
 こ納めりあると、言、是れを借り出せる言、其の皆  
 目録、作ること、右心証と言も、を修をえる心、りい

来分あるに、静儀のこと、其分あるより、四五字の、字証  
 をる、その、協台の持部、其、三十名、列に  
 心証一卷、あり、其、言、と、霊前、に、作、る、こ  
 と、此、分、も、余、追、悼、の、法、説、を、為、す、こ、と、尋、を、決、し  
 終、り、さ、り、協、台、の、前、座、を、也、今、こ、こ、ま、き、や、協、儀、の  
 移、り、以、思、く、ハ、前、座、勢、を、釋、淡、行、と、あ、ら、は、す、五、葉  
 目、の、筆、と、故、徳、哉、か、言、ひ、さ、し、は、は、ら、の、金、ハ、勿、論、利、子  
 大、を、ま、け、る、こ、と、い、は、さ、ら、う、こ、あ、ら、は、す、は、ら、の、徳、行、を、  
 証、の、あ、り、得、て、さ、ら、の、古、抄、も、手、務、り、し、加、修、載、  
 の、厚、意、に、使、用、し、来、江、つ、た、の、れ、が、、さ、ら、七、元、り、上、け、る、  
 如、と、限、ら、ぬ、こ、え、に、就、て、ハ、徳、川、家、の、重、俊、に、向、つ、て  
 あ、ら、う、り、の、由、来、を、候、し、南、葵、又、存、全、部、の

建物を極小にして貰ふ心受けりしとて、此の事も略々  
議の儘まゐらぬ。徳武に此意思もあつたから、自分の生  
前一杯の湯河に湯求に及らんり、其の終に其の湯  
今の無つたの事、遺儀にあり、徳武の継承  
者と孰れ、頼貞氏に其人を得て居らるゝのが、先づ  
此人に継承を請ふのが順序にあり、徳川家にお  
してこの湯河に七あるから、先づ方針をこの事、こ  
れの中、陰のめくことを候し、申入ふことと決  
す。

六月十三日記

○この湯河に乗ると同書を池の里門町文行本に二種  
の書と贈る。

一古文ある書三冊

二十冊

十二行

此書は利の後に花する、宋本を細川家(徳川家)  
道に於て二覆刻し、其の事也、今も版木の回家に  
存するが、往々若摺り世に出づ、寛文前余の  
得たるは乃ち若摺りなり、其者店の湯河に七  
二冊と傳、附し、寛文に七、其の事也、早家花  
本、余を七とる、其の得たるは初版也、珍重す  
べし、價七、同也。

一 湯河考

一本

寛文十二年屋代山買刻す所の享祿を  
也、此書の版木三條家に歸し、若摺り出  
づ、余も亦一本を花す、今日偶に初版を得  
たり、其の装釘古く美、印刷紙縹々也。

可多此有梅花志し 六月十日記  
あり二日就てあらましと云ふ

狂歌成さくつり 一冊

此の狂歌の價値も口傳七枚北條の  
細画もかたし息もあま七枚の圓  
ハ活字の名おまゝ一冊の二階二階河  
を春景三歌去年年礼四浅首親  
世音五あま橋六草尾七芝石七  
瑞殿山狂歌のまらつきる傳も勿作  
あり、美活字をこ

漢語同解 三冊

此の漢語同解の本が一程の改味をいへ

ゆくとも徳川代のこ流のおかへりもあは  
文の禱禱の味もあは此のち七枚おまゝ  
の次三年の出版の傳り止るの五月廿  
五の廿五日あま草尾七の傳り  
漢語をいへり漢語を習ひしと云ふ故  
向と見へり、此の漢語を習ひしと云ふ故  
今も新し味を圓面に感てぬるを  
すくも舊式もあま草尾七の傳り  
し、圓中に鏡袍あり外務方更あり圓  
旗もあま草尾七の傳りしと江戸時代を  
とて異るるものあま草尾七の傳りしと  
三編の傳りしと天王寺の傳りしと



# 鹿谷寺と岩屋峠

## 法隆寺の石材は人造に非ず

### 奈良朝時代に用ひられた 寺院の礎材はみな火山岩

工學博士 關野貞氏 談

法隆寺金堂五重の塔の基礎の石は、上代から下代の石、または石積に多く用ひられた。時代から奈良朝に至るまでの佛寺建築に盛んに應用されてゐるが、これは俗に練石

#### 一時

は人造石だといふ學者もあつて當時の文化の進歩を示したものと見て有るに至つた。そのを、聖德太子が「法隆寺」の金堂の基礎は人造石にあらずといふ説を出して以來、現在までいふことになり、近ごろまでは誰も疑ふものがなかつた。大正六年法隆寺の佛堂の基礎修繕に際し、その基礎がやはり同一石材からなることを發見した。そこでなるべくならば同一石材をさがして修繕をしたと思ひ、その石の出所だといふ一山の北の穴、について調べて見た。奈良縣技術師天沼博士と同道して穴の北の穴「ドンダリボ」といふ所で、灰岩を

#### 發見

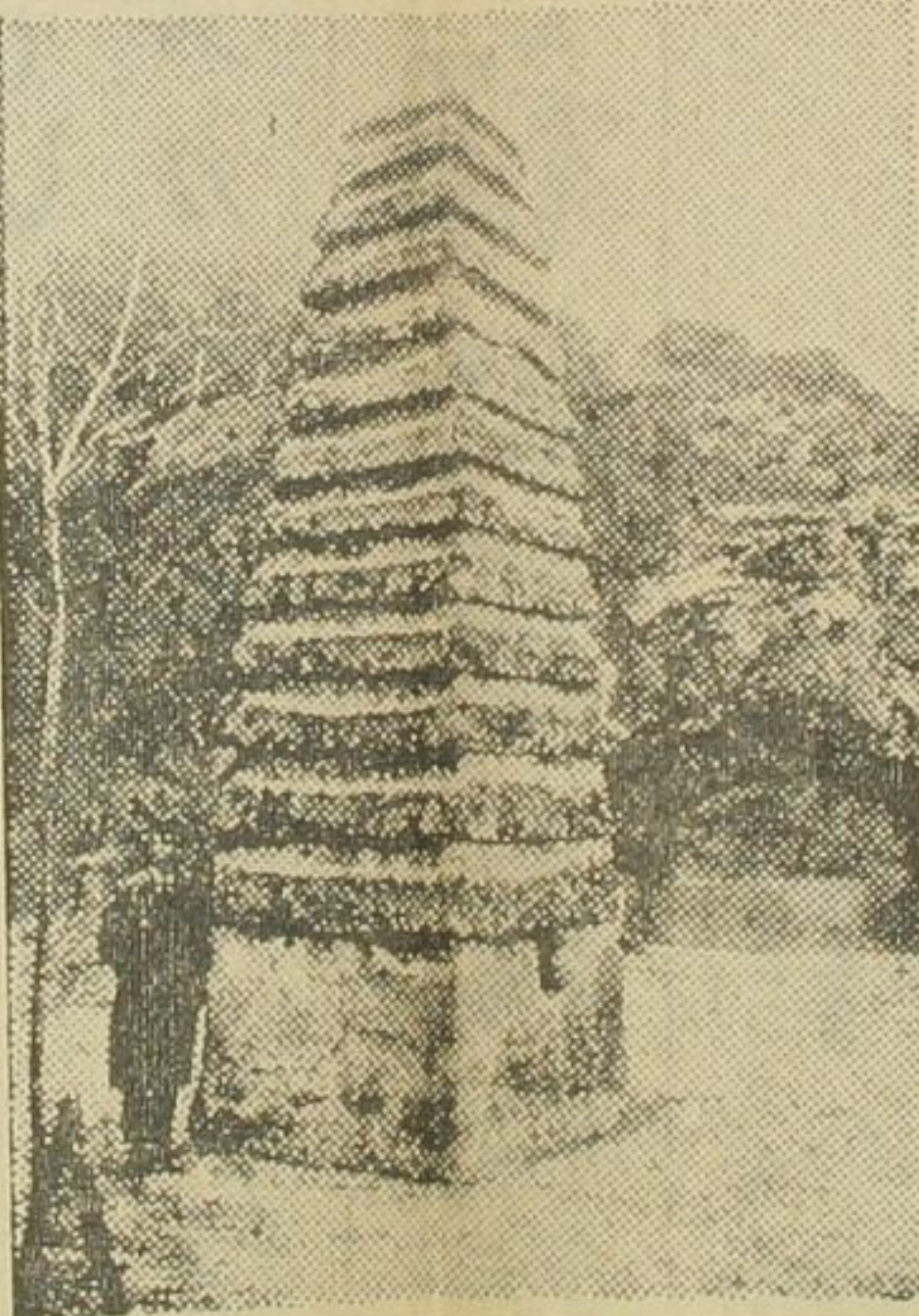
したが、どうも性質が少しちがうやうであつた。これより前、大阪毎日新聞の岩井武俊氏に河内山田村鹿谷峠に法隆寺石段とおなじ灰岩で作られた十三重の塔があることを聞いてゐたので、穴の探検の翌日當麻から家内をせよと二上山に登り、雌嶽の南の岩屋峠で、まづ大石窟を發見した。石窟内には自然岩から切り出した三層の石塔が立つてゐる。その岩を眺めると、法隆寺の石材と全く同質であつた。更に鹿谷峠にいつて見ると、そこには自然の大岩から切り出した十三の塔や石窟があつた。この石材もまた法隆寺と同質なことがわかつたこの石に

#### 就て

はかつて理學士大場正雄氏が「火山岩の調査報告」を發表し、岩屋峠の岩は二上山第一回噴火の際の熔岩即ち松香石の分解したもので、岩に似たものだといふ説を發表してゐたが、これと法隆寺の石材が同一だといふことは誰にも知られないことであつ

た。前にいつた様に飛鳥時代に至る佛寺建築にはこの石が盛んに用ひられた。即ち聖德太子東塔基礎、東大寺大講堂及僧房跡、秋篠寺東西塔跡とその基礎、その他大安寺、福寺、法華寺、超弁寺の境内または當麻寺石燈籠、龍興寺石塔、石位寺の三尊佛石などの國寶、或ひは牛城宮大極殿跡などから見られた。記録によれば日本書紀の崇神紀に出てた、著の墓を作る時大坂山より石を運ぶとあ

鹿谷寺石塔



#### 盛に

用ひられ、歴史上重要な建築は多くその恩恵を被つてゐるのに、永らくその出所が不明であつたの、めづらしいことである。私は本年四月吉野へ出張した際、少時の時をさき、奈良縣技術師天沼氏と共に二上山を踏査し、岩屋峠と鹿谷寺をおとつたが、大場氏の説のやうに上層は白く、灰岩のやうだが下層は黒い、玻璃質の岩であ

#### 朝鮮大編纂

朝鮮大編纂委員の出來たことは何より喜ばしいことである。修史に當つて自分は韓併合は我國の征服のためと誤解してゐるが、支那の平和の爲め人民の福祉のためといふことを心にしたい。第二は日本の歴史のうち

▼足利時代以後の史實は却つて朝鮮に残つてゐる、これをとり入れること。第三は朝鮮には由來東人西人の兩派があつてこれが爲め歴史の正確なものがな、これを改めること

▼史實資料が四散してゐる、甚しき高麗紙に書かれたことが宇治茶の包紙に買収されたことがある。この遺蹟をふせぐこと等がその眼目である。(京報、稻葉君山氏談)

時代のものらしく、繁華なものであるが、自然岩を掘り抜いた盛でも、またさういふ歴史的な石材を用ひてある盛でも日本第一のものである。鹿谷寺の石塔は當麻より雌嶽の北方を、つて河内へは入る分水嶺にある。高さ二十二尺、高さ十八尺、深さ十三尺六寸あり、中に二重の段があり、五重もしくは七重だつたらしい石塔が掘り抜いてあるが、今はかけて三段になつてゐる。此方の有志から成る名所遺蹟保存會が最近出來たらしく「岩石や樹木を大切にしませう」といふ標柱を立て、あるが、近時

春吉野丸奮然の園あり、漢語右傑射談の  
名、香閣寺、吶喊の聲、大曲無道は漢く寺のち  
あり次の頁に大徳寺焼考の跡を記し、切  
康主、切齒、茂如、高談雄論、寺の漢  
語あり、おろしき、日本外史二冊を畫し、  
んて声價頓振の漢語あり、依倉宗彦、離  
別の園に賦、彼の漢語あり、此次の漢語をま  
た、新式、新語、新出、新書、新記、新書、  
べし

一 粉私依形氣

五冊

の和九年大改訂の巻入るる、向人の心、未  
詳、のまゝ、らん、らん、自天共破の家を、  
十二行

の乳、後、本、  
と、一、種、の、改、改、あり、珍、を、ま、ま、らん、らん、  
ハ、稀、本、ま、ま、  
ハ、稀、本、ま、ま、  
ハ、稀、本、ま、ま、

○大正八年大改訂池田史談合編、  
史を讀み、  
の、市、歴、の、大、略、を、新、り、得、り、  
祖、を、清、の、池、こ、ろ、も、  
寺、を、  
ま、ま、  
酒、ニ、春、令、酒、の、  
酒、ニ、春、令、酒、の、  
酒、ニ、春、令、酒、の、

遊、其の事、満願寺九郎右衛門の筆、既に一千三百  
五とあり、あつた江戸の狂歌に「あま酒と宗方あいの  
満願寺、すまめ下戸に珠敷を切らせん」と  
あるを以て思ふ、満願寺酒の江戸に盛んに行見  
るを見出し、ケ程の醸家が何れに没せしやと宗  
方、あつた三年六月に御朱印を伴つたか起りたる  
子の事、瑞々新真の酒造、年寄の大和屋大三の  
提起も、初年三つある迄、遠の出訴も、初め満願  
寺九郎右衛門の事、昔の家柄を楯に、野守  
家より受領も、池田御所の朱印を五家の祖元  
が受領し、その誤りも、言外で、瑞々  
一問、延七池田御所の死、治の事を悪き記

遊、池田の事、御朱印の事、瑞々新真の故を以て、官没  
七、九被免、満願寺九郎右衛門の事、遊に、徳徳の厚  
を、受りたる事、御朱印の事、瑞々新真の故を以て、官没  
ハ大和屋と満願寺の事、瑞々新真の故を以て、官没  
池田御所の事、御朱印の事、瑞々新真の故を以て、官没  
受領なり、満願寺の酒造の印、小判形也  
此家の遺址、今も池田の事、瑞々新真の故を以て、官没  
ハ八棟の酒倉の菊座の紋を、屋上に掲げて、額度し  
る、瑞々新真の事、御朱印の事、瑞々新真の故を以て、官没  
未だ、瑞々新真の事、御朱印の事、瑞々新真の故を以て、官没  
○一昨夜、華族分會、於て、文の協会の、茶話會を  
砲兵大佐、小林昭一郎を、招き、講演をさせ、是れ、三八三

時分の長きなりたる大戦後六集の豪華の一の大なる  
 ことと随<sup>合後の</sup>て由たゝ多る影<sup>影</sup>を興つたことと評説  
 の要眼<sup>要眼</sup>にありて、北人の破後をも自身を世界大敵  
 の陰<sup>陰</sup>に親敵<sup>親敵</sup>のたる佛四の大名をもおれ關係から殊  
 二佛四の六集を奪ひ、佛人を奪つてある。○此の  
 事<sup>事</sup>はス。パイクの嫌疑を受けおてもやまへは、  
 ともこの爲め現役を罷免めえ、を人不可<sup>不可</sup>執<sup>執</sup>に  
 評説も七陣中<sup>陣中</sup>攻勢の鋒銳が鋭と現<sup>現</sup>れんとあ  
 り、併し其の言ふ所の佛<sup>佛</sup>と復す<sup>復す</sup>ものがあつた。今一  
 二とよま<sup>とよま</sup>る等の頭<sup>頭</sup>に深<sup>深</sup>の感<sup>感</sup>を興つたこと  
 と書きつけて置か<sup>て</sup>

佛四が奪る所の生霊を犠牲にするべしと云ふ

入りの今主<sup>今主</sup>があらうと云ふこと此の體を評す  
 人の知る<sup>知る</sup>教<sup>教</sup>の文字がある、北區の一砂片土と云  
 七我佛人の奮<sup>奮</sup>四の肝<sup>肝</sup>の化<sup>化</sup>体<sup>体</sup>があるから此<sup>此</sup>区  
 域<sup>域</sup>こそ入<sup>入</sup>つて、蕭州<sup>蕭州</sup>を正し宗教<sup>宗教</sup>をを  
 こ<sup>こ</sup>に集<sup>集</sup>注<sup>注</sup>せん佛<sup>佛</sup>の志<sup>志</sup>を整<sup>整</sup>つて此<sup>此</sup>の一區<sup>一區</sup>  
 あり、如何<sup>如何</sup>に楊<sup>楊</sup>の砲<sup>砲</sup>が極<sup>極</sup>烈<sup>烈</sup>なるし、  
 砲<sup>砲</sup>のた<sup>た</sup>下<sup>下</sup>す<sup>す</sup>、地上<sup>地上</sup>のあり、何を<sup>何を</sup>物  
 離<sup>離</sup>して、建築<sup>建築</sup>其他<sup>其他</sup>あり、形<sup>形</sup>ある、今<sup>今</sup>も影<sup>影</sup>に  
 かさ<sup>かさ</sup>、地<sup>地</sup>を<sup>を</sup>化<sup>化</sup>を<sup>を</sup>生<sup>生</sup>じて<sup>して</sup>識<sup>識</sup>道<sup>道</sup>の如<sup>如</sup>き<sup>き</sup>、<sup>に</sup>後  
 境<sup>境</sup>とん<sup>とん</sup>に<sup>に</sup>こ<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>事<sup>事</sup>を<sup>を</sup>か<sup>か</sup>さ<sup>さ</sup>る<sup>る</sup>、<sup>と</sup>減<sup>減</sup>す<sup>す</sup>、<sup>も</sup>減<sup>減</sup>す<sup>す</sup>  
 と、今<sup>今</sup>も<sup>も</sup>一<sup>一</sup>物<sup>物</sup>の<sup>の</sup>崇<sup>崇</sup>基<sup>基</sup>地<sup>地</sup>と<sup>と</sup>化<sup>化</sup>し<sup>し</sup>あ<sup>あ</sup>つ<sup>つ</sup>た、今<sup>今</sup>も<sup>も</sup>

道路之後、崩れにともなう破壊さるに軽便隊  
道のしーんの破片の今も散在してあるのを、敵  
時中敵前に架設して軽便隊の名残りである。  
此地を防ぐ為め、或る日の兵を殺したる軽便隊を  
架設して兵や物資の運搬を固くするを得  
る。うらにむかふ、或る日の人を犠牲にして僅か  
架設する軽便隊、其日の内に破壊さる、その日を  
僅か、<sup>（？）</sup>架設して、一日僅かに二時間用  
まじ、<sup>（？）</sup>可なりと云ふ計算から、敵前架設を  
僅か、<sup>（？）</sup>にともなう、此の大砲中の砲力も  
既往と違つて大なる差をもち、吐き出せる  
砲の砲を一所に集めること、出来ぬ。遂に

敵にその照準を過る目的の意、深丸を  
送り得る、勿論飛行機の働きもよりのみであるが  
實に恐るべき進歩を見たと云ふ、機械の働き、徹  
底的に荒し機械で勝敗を決し得るよるとするは  
福也、勝つに云ふ、<sup>（？）</sup>得るのみである、<sup>（？）</sup>開身佛人の  
殉国の精神、機械的砲力に屈せず、肉を以つ  
て戦つた為め、此の地の占領を免かん、銃砲防  
ま、果せばのみある、絶大の砲力か、何の威力を  
つて或る地點を格殺して、まを占領せざる  
ハ、勝の一字を許さんとのみある、此點を占領  
へると、今日の如く大遠距離砲を放つこと  
が出来ること、うらに、昔の如く、格殺

事違つて占領の空を困難にする、防禦軍の  
この漢國の空を執るべきに、敵が占領するまで  
この防禦の地を占領するのだ。

軍兵が改良されるべきを、敵との距離が遠くなる  
傾向がある或る萬年ローソクの距離を砲丸の交換が  
出来うからである。昔の頃の近距離が  
戦うまじい熱に乗じて土地の占領も出来るが  
今のよういふやうな勿論大勢を制するに占領せ  
ずして勝敗の決するまで相違するに似て、  
戦場の規模の差が大きくなるを得ぬ。昔の頃の  
戦場の或る区域に限ると併し世界大戦後の  
戦場の傾向は、四土の全部が戦場となること

いふより飛行機が遠くを飛行し、敵國の全  
土を威嚇するからである。何れの地も是れを  
得ぬ、随つて戦争となるに、四土を挙げれば  
場所の心算を以つて、國國民を挙げれば、  
すべからざるが、無ければ、いふまでもなく、  
飛行機も今の空を、停止が出来ぬ、  
て敵土の上空をおろし、その威力を揮つて  
空を占領すること、降つて其の地を占領する  
力も無い、今日の後の戦争は、立体といふの  
好癖を論じてあるが、亦、抑えよう、  
飛行機も、  
行機も、  
二回し位、  
銃砲の強さ

が空を飛んじ或る地踏こたを格あのおもひ  
まの勿論飛行機の重火多し働きを為す相  
違ふの併しその働きのまじりて偵察心ある  
又威嚇心ある空中に爆弾を投して地上  
の物を破壊し急ぐ火災を生ぜしめるも  
飛行機の働きのいあるが、北極下の  
回民に決死的精神なきは威嚇もせん  
效が真の火災も防ぎ得るは其の金  
大戦より回民が血を流すは其の式のこと  
ハ其の操りたることある併し飛行機の銃未  
も防くことか出来ぬ防くは誠しにことなるか今  
の要防くことか不可能ある、銃を来と分りて飛

行機の對抗すること、妨害を為すは効が真いむ  
るのいけんも敵の飛行機を射たすこと  
空に不可法もある、格あ他空の飛行機を射  
たすも出来ぬか、高きむ鳥のこと、位互不  
空のもの、あること、出来ぬ、アタレ日ことか  
ぬ、偶れアタレのひある、  
何とまある戦争の主力は、大砲である、世界の大戦  
前ま、重砲を運用することが容易か無つた、其の  
非事、重量の砲多しあるは砲を分解して  
運搬すること、七七を得るるは、世界大戦中  
に重砲をドナナ所、七七の砲車、このつれ、ツン  
く、運ひ得る、格あ、其の風、その、佛國、心、其後

ニ風山重砲の終に敵砲におち出さず、砲の湧  
ル心ありたか、そえと活動音をいひ見ると、山と  
ろき入つたよむ、ドニナ山攻むもドニナ道形を  
るさぬ、山、回のあるまむ、ヤスくと、砲の架して  
ある車も動く、扱ふううてある、其の車の仕掛  
ハ敵軍の初期にエ風をたんだタニクといふよ  
、仕掛に似寄つてある、まゝ合するから思ひついで  
エ風を疑う、これよめあうう、コニナ風力を押  
あよと目の他、容易く運び得るだけ、軍  
械を張る、働かせ得るから、兵士の革命、  
真に敵軍の心ありて、日本の兵を打ち、  
ぬら、較へると、その大時代、おむ、退歩、  
十二行

（得るすむの、海陽を生、  
扱橋操

○伊松の津より、未知の人、余の近著山陽を讀み、又一  
夕浪をよみ、蟹の泡を讀み、余の心持、  
の詩を寄せて来る。

山陽

山陽の光の照る京都の錦、  
畫出傳神、筆、  
筆、  
筆、

蟹泡

臥試横行四海、  
鄭子山宮下、  
一夕浪



隋珠趙璧一時雄、歎り雲元昭日來、奕日形  
神飄逸態、文苑藝圃仰芳風、

拙著と稱し未だの人も日く必出するものなるを言ひて母  
の如あて也  
六月十日記

○何ゆゑと問ひ答へて曰く是れ後復た汽車  
を造りし無聊をやと云ふはさうくの遠慮談を  
やの以、目自今、日向時代は遠外四五の友人と  
誘ひてゆく事と云ふは時の子を待たず、女の落着か  
此の比比前と勝采もの物と云ふはあつたとい  
ふと遠慮の事と云ふは、實にアノ際の子、を考き  
つけばよか土なと云ふは、生舞舞が出来る比  
と語る、書の名も初めのおぼろに人々とつけたり



清長筆出語 (六五頁 五號参照)



清信筆兩國舟遊 (六五頁 二號参照)

一を此頃ハ  
八犬傳の眞  
味が腹に  
うつけり  
いと面白  
及んば  
送早大坂  
相の村山  
と上野に志  
きりに入社  
を説かんと  
時の危除

ひ女の心、自分を返くする月給二万圓を以てする條件  
であつた、此頃二万圓の優遇であつて、自分せうろ、稼  
ぎ僅うの家計を支へ、此頃から心動いたが、高田  
が注意を以て断つた、●云々、返くする高田的の  
る情を語りて、高田の報のうを、織田純一郎が、  
説七社説を考へておれ、自分を脱走とし、此のを  
織田の代へん、此の、無論論説も考へせる、つ七  
り、あつた、此の、村山等の、青島眼、其の、  
と、機械敏び、あつた、と、感、此、ほ、ゆ、あ、返、く、高、田  
この一年後、して、存、事業、此、給、費、が、絶、へ、て、一、年、又  
自力で支へるを得る、う、た、ま、ん、か、考、へ、る、道、文、を  
余、田、人、社、開、成、後、返、く、る、と、高、田、考、へ、る、考、按、こ、こ、

から、れ、を、切、り、去、り、し、た、を、心、の、時、分、に、あ、ぶ、さ、一、か、つ、た  
よ、い、こ、の、か、出、来、る、譯、か、ま、い、と、い、ふ、某、を、考、へ、元、町  
の、お、い、つ、つ、の、大、子、に、在、り、中、心、あ、つ、た、の、心、が、  
返、く、去、る、高、田、の、二、も、高、田、四、味、の、関、係、に、就、て、云、く、あ  
れ、い、自、分、の、中、心、に、あ、つ、た、が、自、分、の、心、に、あ、れ、の、業、物、に  
あ、る、自、分、か、断、れ、た、設、事、の、業、を、絶、つ、た、の、も、あ、れ、の、啓  
者、ま、う、感、を、不、か、あ、つ、た、か、ら、た、村、上、浪、六、の、こ、と、を  
聞、く、と、思、ふ、と、あ、れ、の、報、知、記、あ、つ、た、初、め、の、高、田  
考、り、高、田、に、教、を、示、す、た、ま、い、と、い、ふ、肌、か、も、う、う、い、  
疎、遠、ま、う、た、ら、う、い、い、ま、高、田、考、り、と、自、分、も、あ、つ、  
同、高、田、の、関、係、が、あ、つ、た、(カ)後、返、く、あ、つ、た、校、に、ま、高、田、の、心  
店、を、つ、ま、い、た、こ、の、ま、就、き、あ、つ、た、返、く、あ、れ、の、高、田、考、り、あ、



又印箋：あるは上：柱を丸也。鞘を押せば刀  
身の全体をうりんとし、雲気あり、空に引く棒をえり、刺  
者の刀の呼吸、又の側面を何とぞも現れぬおるは  
り、況んや伝由の事、これ柱を也と、少ありは此後記あ  
り、印肉を心す法：就て、支那のハセマシクの法あり、  
昔ハ唇朱を主として用いたるものあり、今ハ  
銀をとりたる朱をちから用也、唇朱ハ今ハ支那  
日と用也、いんを瘡物より、日をとりて今葉種尾  
ハちから富山：あるは、富山の葉葉葉や、  
朱もこのものあり、唇朱を用也、又支那  
日と柱上の朱も、心すハ種の朱を混す之れを  
ハ寶印也とみけとある、此ハ朱肉ハ色もよしと

いんがのまゝに又ハ、朱肉の特長を、日後款の印  
三平の偽也を防ぐ効あり、此ハ意味も、も種々の  
印色を二風す、と見く、印肉ハ金を和するの  
結果得也云、いん肉色を海に、何とぞも、豊か又  
ハ印肉を和す、いん肉ハ、十の朱肉ハ、三と由、  
ハ金粉を和す、いん肉ハ、印を刻し終り十  
五ハ、乃ハ、平ハ、使用す、ハ、刻面折合、ハ、  
と何人ハ、初め、ハ、折合、ハ、塩、ハ、  
ハ、印面を磨き、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、  
家の絶法と、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、  
ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、  
ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、  
ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、

せむすといふ、必竟同じ作用におもひなり（六月十日記）  
 心人の田の政文飛吟を印譜を撰すること年あり  
 才五帳の邊に成る前年、余のなると物と印譜中  
 汪啓淑の私印を懸ひ一冊二巻に持して貯るゝ今  
 日六、百餘個の私印ありて前巻に漏れり、よの  
 を持して貯るゝ北印譜中或は他人の印混し  
 おもひ知り、且々疑ひ、きよめを左に録す

- 敦撲堂 竹中社 三原山房
- 春暉堂 印禪居士 穀川侯八十三世好
- 古菴山房 古菴山房 松視齋
- 綿潭山館 平陽世家 漱石齋
- 桂山苔堂 十竹軒 碎香道人

漱石齋

後來のさかき齋と名も同じ齋一軒在り上り  
 よの汪の印とてこゝに記せり、以上の内汪の印  
 と推し得るゝ、よの安んも且々疑問の内、録  
 載す

の昨。敬業中一左の二書を録す、（六月十九日記）  
 一 お相醫話 一冊

森立之のお妙、客中実験し、遠  
 法を木活字より刷行し、つゝ、  
 匠者より、五之の著ち、が、思  
 味あり、巻首著者の引を、思  
 主之相、ある、と、十二年、と、

リ、此書を著し、以て弘化五年を引  
の終に左の語あり

弘化五年戊申三月三日相州津久  
井縣勝瀬村聽濤舎の東軒に  
書す木村立之

文久四年一受業中唯定之書、こゝに開  
成せらる。

一 さくら山の歌集

奇兵隊の初死者の靈に捧げし  
和歌集、こゝに梅山と相現社不在  
地、馬関、と出版し、こゝにさくら  
く巻尾、こゝの兵隊花散とあり梅

一 法圓式道容氣

五冊

山詩集七道刻のより一巻尾にあり  
刻成り、やむやむ詳からざる、初  
年と認ぶの一巻と一巻とすべし、  
享保二年改、此書場あり、一紙裂九あ  
り、補ちを要す

一 割湯漫録

二冊

○ある年、河の刊本に、韃靼録といふ、  
一巻あり、信州勝萬所、此書の著者、  
中、こゝに未脱  
こゝの考一説あり、左、おぼす

二月廿日

流俗の世に良醫の病を診する糸脈を控し知  
云い侍り此の古の醫に云い見ることあり然れ我  
邦に何人か此の言を云い出せしむるやと思ひしに西  
記と云神史の書に唐の三花西域に遊し時獠行  
者と云ふ弟子を誘ひけり或者西の王病を尋  
たりから三花其玉を授けしける行者の醫に  
二みるることを知る人あり王の病を診視せしめ  
人と云り侍り行者の祖は獠の種子を尋  
姓するに四王の昧るに少りしを授けしる  
を隔て診視せんやと云ひけり此の脈を糸を  
て候ひ得しと云此等のことから何と云  
云い侍りしことあり

○森立之の抄相醫治卷首に去蓋東洞の灸多一則  
あり侍りし

去蓋肉助の四十四歳を空部に裏衣を借り木保  
人を造つて生草をとり或時洞をく例の如く傷人を  
携行しに鋪上開けしは如何なる如と尋し  
に而家の父母傷寒を患ひ時多病候馬と  
云ふ肉助を拙者にて来醫用者の子をんと微  
運ゆくは固く弱きなり果ししる今去母の  
大者と云き殊る傷寒と云ふ何と云一診政  
しはしと云いけんまの云ふを平生を康  
まらざる肉助を診脈の云い若しあるは  
えらざる肉助を病候候はざる肉助と

くと診察の上何人の執事も聞かざりて禁  
裏附御返り山陽道心てしるる事と申す  
云々あるが如く誤法ある事しある事  
業あるお見いなきしと山陽の事を知る  
りせんまへに向いし事大痛りんとし治癒  
法を得んが最早自に快復を候くし但  
今より石膏を去り用ひ死さし山陽氏  
未診ある肉助かく診るとありし事  
帰りけり元より主人もさし用ひ候を候  
もささりしか程も山陽例の如く来り診終り  
薬を出し油割にかかりかせと教りてや替  
く思案の体うけけりて主人道心出て事か  
十二行

唯笑極に傳る事あり候事余の家元未出入の木  
偶そ肉助といふ事あり候事前條の次第を  
述べて候りしかは山陽横手をうち候事  
事あり候事余も今石膏を用ひ候事  
其事に従ひ今も石膏を去へしと申  
別條にて肉助の傍に候事候事候事  
候事候事又肉助に候事候事候事  
時肉助の事候事唯一人一燈一鋸の傍に候事  
候事偶の木房或堆を成り候事但一部は傷寒  
論の事候事候事候事候事候事候事  
及ひ候事は厚湯を候事山陽に候事山陽解





子元来無号なりと一字をあらざるを結りて、固く學術自  
から別するの理を辨し、且子宮の口周囲凡四寸五分  
其中、手指を入て探ることを得る、こんを手術と  
云ふと後き試と先づの圍み四寸五分の巾をす許り切  
出さるしとを其寸法の巾をもたせおさむとを座  
上に坐する金甲の履頭を右の巾の輪の中より  
指を入ん全くと取り上げけり、かゝる妙手あるは手  
術と云ふこと必有るへしとを遊に治を命せり、子  
元子治し得るあり、今晩せんとす、こゝろ其  
名海内と振いけり、元来子元子の手指必つて細長  
且自在には比るとき指頭が方あること絶ぬ、さう子  
元子か、この指力するうけん、遊に鉤及其他の

其子作り出したり、こん手術をむつる父に及らざる所以  
なりと中尾の野崎采碩語なり 同上抄  
○元来心電り来る者時間農村問題に心多議  
に關し論議し且つ地方の治安をすく、心多議の  
謂えり、起るものあり、其に危殆思想の  
輸入、つん成る煽動家の教唆、さうもあへども、  
おのづから起るべき原因あり、乃ち田地所在地、地  
主のあり所、小作議、が遠隔の土地に任する地主に  
下有る、場合と起るを考へ、此等土地  
主の市町にある商家、さうもあへり、或いはさう、或  
より、所謂いかに成人、さうもあへり、おのづから  
等の人、祖元以来其土地を不居する、さうもあへり





史的縁因もあつたものゝ、みづからえを破壊する  
し、心配の争ひの生ずるを恐むる留んるまきまきと謂  
ふなり、若村の夜焚は、進んで大地主の地方を占つて  
都下に来るまきなり、之を刑せしむるを、地農村の  
振興を望むる心や、その教育制なる地方農民  
の子弟をして是村におんりして居任し、労働せしめ、  
育ちあはせしむるを、米糶を棄て去つて都下に来  
らざるの教育を、云ふは、年と歳とる世の子弟の都  
下に集まるるもの多く、若のは是村の若し人まきま  
し、此の心美地なり、若村夜焚契せしむるとするも、得ん  
や、今後の方策は、都門を鋭くして、地等を、つ前拂と  
する方無ん、あつた、大地主の浸るる都つて来るを、  
拒

純するもの、重き都府税を課すも、一あるも、  
の浸るる都門に来るを防くも、若の其身元や志  
を調査し、退去を強制し、あかすん、植民地に移  
す、一あるも、一旦都門に来り、都府の分り、  
浸るるもの、地方に復ゆする、バ種地、地方の、  
壊敗する、ハキルスとする、り、云ふ、口、百、ふ、  
利、産、速、う、の、英、断、を、施、す、ま、あ、  
は、後、に、拾、収、す、可、し、ま、あ、  
り、奉、け、ん、さ、下、夜、焚、火、の、如、き、  
頼、ま、へ、き、ま、あ、り、の、説、者、の、大、活、動、を、持、つ、  
外、  
六月念り記  
の、協、文、政、の、大、陽、か、り、手、紙、の、味、を、就、し、一、論、又、を、

いづくかと頼みん此、題を書物礼讃として自分の古詞苑  
 集の事や大隈家の古詞調への言一を考へ序に以て  
 評後千紙の致味あるよをいろいろ考へて書き  
 けて見ると三十則を、まんじや、類を三を得る異  
 色の致味を数、得る、を致せんに詞単一を注を  
 各條に附して帯短を心り畢らうに、左のハ在り三  
 十則を挙げておく、

六月廿二日記

自分か長い詞名家の詞と親しむ其の味は得た所を契  
 一詰めると三十則に包摂する其弱るる味嘆三  
 十則を考き得るのを、多くの古詞と觸れれば果  
 とも云いようこと、

古詞致味三十則

- 一 能筆能文(古美文素美)
- 一 筆の墨跡の存する人の古詞
- 一 筆者の性格を赤保に現はしむるもの
- 一 天下のちやうと語ること
- 一 偉人同士の性格
- 一 意外の事、觸れたる古詞
- 一 文章韻脚の通する古詞
- 一 我畫的歌謡句を文の古詞
- 一 他人に先たる古詞殊に極するに達するもの
- 一 或る種の婦人の古詞
- 一 詠詠の文

- 一 絶筆とらざるも書簡
- 一 書簡を記したる年月の意味あるもの
- 一 手紙の外に絶対的墨蹟の傳へたる人の書状
- 一 紙中にもあるもの書信
- 一 書信の跡を尋ねたるもの書状
- 一 一通の書状に往復の文の傳へたるもの
- 一 隠語の書状謎の文
- 一 書貴人多く奴僕に述べてたる書状
- 一 主要なる件 関係者の書状
- 一 寫眞の添へたる書状
- 一 寸布(糸)の文を用いたる書状
- 一 旅行を叙する紀行体の書信

- 一 新法に代へたる書状
- 一 書術才に關し亦難論議の書状
- 一 外人の邦語にちきたる書状
- 一 旅行懺悔系に謝罪の書状
- 一 極めて簡潔なる書状
- 一 書簡或は書簡の教味
- 一 書畫骨董の未歴其腹才を叙したる書状

の内田書局より寄るといふ、お七の出する人々を復後  
 年廻つて後ある書守の人物大なる自人か七知の人  
 であるか、あがの思味をさぐる、教人の内田書局  
 初めて其の簡潔や為人をさぐるものもある、内田村雄

の心ときり其の一例である、此人は松屋屋敷の善く徳(今)の  
善次(中)も、同級六七が互ひに珍書や書物を持定り  
つて同堂り社やりの入があらう、早く歿し此の深く交  
いり懐合を得無つたが、研くま記に懐合してある、又此か  
此かまとうそ持定りの珍書や書物の目録や解題を  
此の以上と思つてある、凡そ今日前にテラウ久古幾  
るを持出しと見せしこともありにやうと思ひ内内の者  
に懐合も、此人が書つて空子の考に短く説き及ぶ  
後うら書しの主人は、縁雨といふのが村帷で、其の用  
田の人物も皆実在の人であるといふ、乃ち立村とあるのは  
林義樹の事、若松男爵は再松男爵のこと、此と云ふ自分  
ハ此や説を後人比しことかあるが、空子の旅徳、ホトギス

不出しとある、内田の條に書は、此人の父代は愛泉家か  
可なり其(中)も、此に人比しといふ、村帷もその意味を把握  
し、愛泉で田人といふ名があつた、此人の長養は狂言心  
の家を凌ぐふかの域に達し、養を養男と云つた、画心  
かき御書も、出来、江戸人の面目を有し、此に、此  
人の就徳の事かある、おんひ日を著し、此、徳を著し  
性徳研究も、身を定む、自分も、十年の死に、此、徳を  
あかりの五平海を著し、此、徳を著し、此、徳を著し、  
を失ひ、此、徳を著し、此、徳を著し、此、徳を著し、  
の徳に、此、徳の徳性と、此、徳の徳性と、此、徳の徳性と、  
の判決がある、

○此の坊間を造り、亦二三の回書と稱し得也



一 豊嶋館遺稿

十冊

平沙紀徳氏の文集より米沢の神保行  
簡久等米の梓谷に禮寺の校する下を  
巻首に米沢屋の序あり、此文集と  
巻首の前は詩集也故を、此文集  
此坊間掃に出る所也、余は米沢  
秋田の漫遊程に上らん、此集を見る  
此坊をこむる必要あり、幸に予入り  
たるをよるこが

一 縣史稿

六冊

大槻準の著、上木と見えしもの

十二行

米沢宿の流布、此書この少く、余の記  
こ所より上野の常田の故を、一を  
一あり、縣を考証すること  
去に詳か、と、解体各部の説、  
捕鯨のこと、および、同を極、  
少あり、蓋し、縣者の尤も、  
也、  
也、  
也、

一 雲水文蔚

五冊

寛政年間僧瑞家墨茶、江戸より  
浪速に考妣を弔いんとし、  
行程を記し、  
記す、  
記す、  
記す、

手紙研究の第一人者

K F 生

『蠶の池』『蠶一夕話』などの好著を公にした市島謙吉氏は、最近更に『隨筆類山陽』を公にした。著者は『蠶の池』に畢竟蠶の天才と言はるゝほどの人は、いづれもその言行が常禮をふまず、一風かはつたところがある。世人の所謂『ツムチ曲り』なるもので、言はゞ蠶の構行にも似た行き方である。又蠶は無腸公子と言はれてゐるが、是等先賢の行徳常軌を逸しながら、またその無邪氣なところが、よくそれに似てゐる。この書が讀者に波瀾一笑の興を添へることもあれば、全くその『ツムチ曲り』のお蔭であるとやうの序文を書いてゐる。

た文化文政時代に於ける『ツムチ曲り』の人の逸話を中心としたもので、無邪氣で、然も極めて趣味に富んだ珍談が、如何にも氣のきいたユーモアに富んだ筆で輕妙に描き出されてゐる。『隨筆類山陽』は『蠶一夕話』の補篇とも稱すべきもので、逸話を中心とした山陽の隠れたる方面で、今日まで世の中にあきらかになつてゐない事實を有のまゝに叙述して、山陽の人間味を赤裸にあらはしたところに、これまでの類書に全く見るとの出来ないこの書の特長がある。そして是等の著書を通じても、窺はれる如く、著者は非常な凝り屋で、且つ蒐集癖をもつた人である。▼就中氏の最も苦心して蒐集してゐられるのは、古人の書簡を集めること、長年月に亘つて氏の蒐集したものは二三手通以上にもほり、ことに徳川期の書簡に至つては、殆んど悉くしつくしたかの感がある。類山陽の自筆も百通以上、印刷したのは二百通から見たといふ位、手紙研究に非常な趣味をもち、此の方面では氏はまさに當代の第一人者である。詩や文章は、言はばよそゆきのものであるが、書簡は家にあつてうちくつろいでゐると言つた

如きものだ。従つて古人の人物なりその眞面目を知らうとするには、書簡を通じて見るといふことが、案外な好結果をもたらす場合が多い。氏の書いたものに、意外な卓見があつたり、穿ちがあつたり、變つた觀察のあるのは、全くからした書簡の蒐集に負うところが多い結果であらう。書翰文に關する氏の意見はことに聴くべきものが多く、『隨筆類山陽』にも、可なりそれ等に關する片鱗のあらはれを窺ふことが出来るのである。

どの手紙の名人は古來多くあるまいとのことである。その如くまたわが市島氏は手紙の蒐集と研究とにかけて當代第一流であると言へるであらう。蒐集趣味は氏の天性で、ひとり手紙ばかりでなく、豆本の蒐集にかけても、氏が斯道の第一人者であることは天下に隠れたるいところである。斯く氏は實に多趣味の人で、その好むところが時流を越はず、何に對しても一見識をそなへ、その道のくらうとで『ツムチ曲り』などがある。若し後年第二の市島春城が現はれて、第二の蠶の池を書くことがあつたならば、彼はまさしくその中に収録せらるべき人である。

▼早稲田大學の理事として、その平生を育英事業に捧げつゝした氏にも、實にかうした隠れたる一面があり、その蒐集癖は遂に彼をして専門家以上の専門家たらしめ、くらうと以上のくらうとたらしめ、彼の書いたものには、到底他人の企て及ばざる深味があり、うがちがあり、通がある。その意味に於て四十餘年間彼の隨身し來つた大隈侯の言行を描寫せる『大隈侯一言一行』の近著の如き、如何にも人間味に富んだ侯の半面を窺ふべき好著である。

文あり、南時花流の畫を以てまゝ、乃多谷  
此の勝ハ三十名家の草子に成る。抱一文晁月  
仙云翁木共世嘉日馬江漢玉堂雲雲家  
見草あるのえらうゝもの也。今の人此草の画  
あるの故を以て此を瑞島寺方丈と  
ハ草より文とあり、此書ハ瑞島寺方丈と  
あるの書簡を以てまゝ、卷首  
ニ姫路侯の序あり

二月廿五日

○京都の肉之辻又史庵といふある樂の腕弱を  
再受て焼畑の熱を著しく喜ぶ、樂の本業の特  
徴を授けしめて堅牢のよきものしめしめて  
今の柱條型平版面を容易にゆり湯の板を  
其の心る十数個を賣りし来り示せり、  
○五色の鈴の如き未だ知らざる其の  
よきもの金衣の響あり、又古代の  
此を贈るや、いふ亦如何も堅牢のよき  
樂界に革命を興へんとすを得し  
し心品や、古磁の黒花干あり、  
又ヤ手、精巧な、飾りあり、余七  
一肉地一個を贈り、三寸四方  
十二行

條の復あり、條の時給を施し、  
辛れを、古き皮革の裂衣を、  
カ、螺鈿のガン入也、そのは、  
狭、麦を及して、火後ガン入  
論る、此、何等、の工、  
この家の大雅を、無家と、  
雅の蒲団八景一帖を、  
出、し、を、考、  
六月廿九日

○昨日来の都下の、  
と、  
以て、  
六月廿九日

### 興味ある人柱問題の考證

## 白骨の姿態は何を語る 人柱説を強める諸條件

#### 人骨を検分した。宮内省某氏談

白骨と現れる江戸城内二重櫓地下の人骨の白骨については世評通り人柱かそれとも骨我人骨を掘つたのか殺して埋葬したのか或ひはまた葬地であつたか——と歴史考家、は勿論宮内省でもひそかに研究をつづけてゐるが、この問題に最も關係深く親しく人骨に手を觸れて

#### 實地に

研究してゐる宮内省の某氏の語るところによれば「徳川初期、代々の「雲夜話」には「天地殿と申す常陸守などとも有之候」とあつて考證家は籠單に墓地と片付けてゐるけれど、骨を掘地を實見した所では決して墓地とは信じられない白骨の跡が見ると何うしても二十歳以上三十歳位の壯年で男女は遺骸ながら不昧た

丸における二重櫓と西本丸におけるこんどの二重櫓とは築城術から見て最も重要な地點で現に石垣の高さの如き水面まで三四十間もあるといふ深い堀であるから恰も河川や海岸の護岸工事に際し古木

#### 迷信上

人柱を「人柱」を使つたとおなじやうな理由から右城廓の要害地點を鑑定するため人柱を使つたのではなからうかと思はるゝ

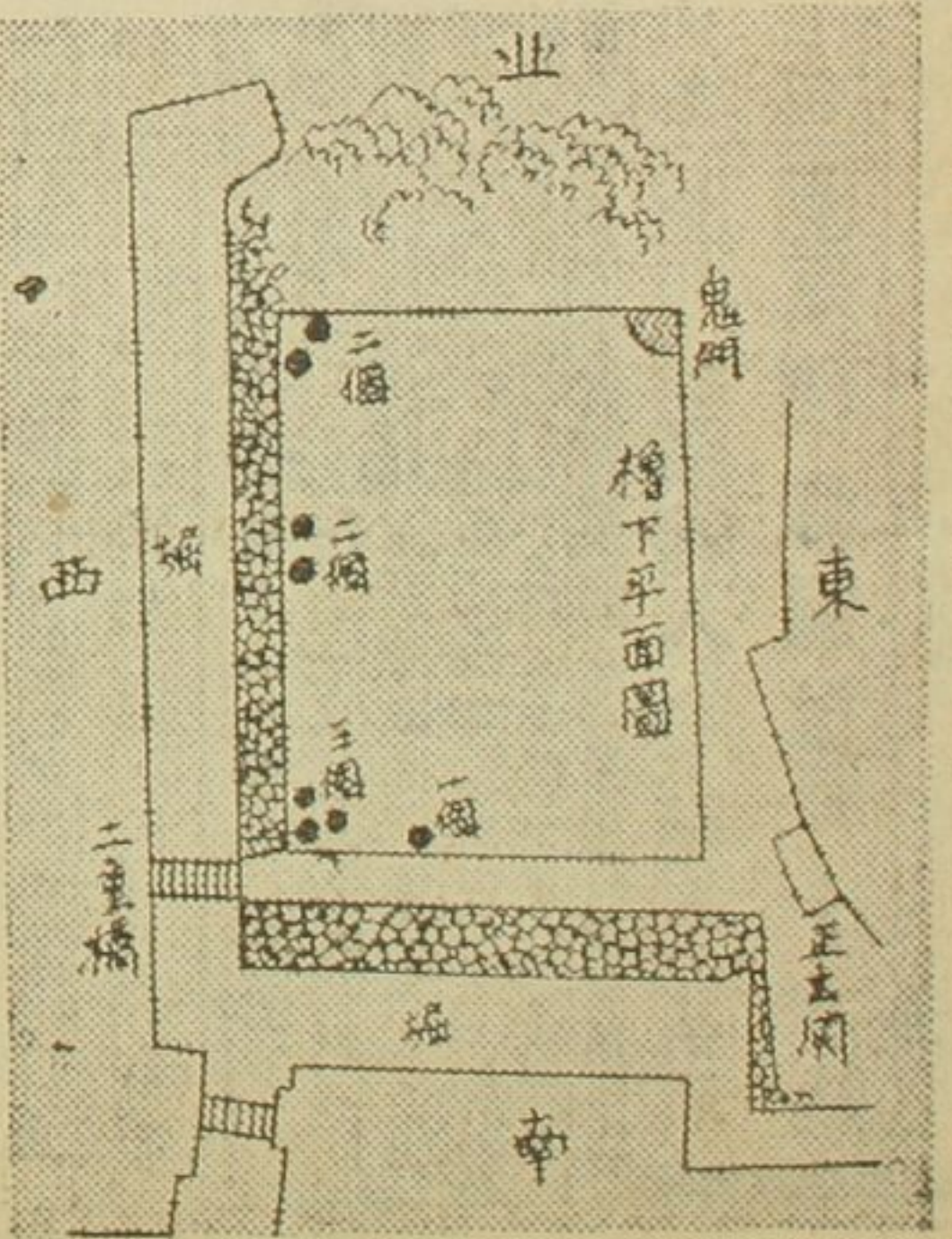
## 有り得べき事

#### 豊臣時代の人柱の實例

#### 加藤玄智博士談

「人柱説」を荒唐無稽として一笑に付する學者もあるが私は事實あつたと確信する古いと

人骨を掘出した場所「二重櫓跡の圖」



## 人骨に就て

#### 宮内省發表

宮内省二重櫓地下より人骨八個発見されたと、宮内省は廿四日午後三時左の如く發表した。六月十一日人骨三個、廿六日同四個、同六日同六個、同廿三日より発見す。盛土の下二尺乃至三尺の深度にありき、櫓の西南隅を中心とし、一つはその南邊北に二尺、西に六尺の間隔をたもつ

## 帳記

柱と思はる、白骨が出土したに就いて、徳川時代の豊臣君が考證すること、昔築城の際に「人柱」として生きた牛を埋めるのが例だつた。漢書に三穢五刑といふのは、これで白牛、白羊、白家及び巨鹿、麋、鹿、鹿、鹿、鹿を指す。またわが國で城を築いた後にその設計の秘密を他に知られぬ爲工事の秘を殺してこれを城内に埋め、これを釣天井の語にしてゐる。▲加藤清正は朝鮮式の築城をなし、竣工後工事の人を犠牲にした。江戸城は長祿二年甲州流軍學の大家北條氏が太田道灌の頼みにより工事したもので櫓から八方が見える爲八方櫓の稱がある。▲二重櫓をかこむ多門垣は筒眼、或ひは女垣といふが、この女垣の稱は處女を犠牲にしてうづめたから起つてゐる。處女は見かけは弱いが操守の強いといふ意味から城の堅固を象徴して「犠牲」としたのである。

ので之を修葺しやうとした時同地の阿部安高といふ人が人柱になり安高の靈は豊前守の靈神として慶長十四年以來今日まで祭られてゐる。また御前の國の入江を土地で堰止め新田を開墾する際、後家のお氣多といふのが人身御供となり今日でもお氣多明神とまつられてゐる。これ等は比較的新しい例であるが鎌倉時代に仁田四郎忠常が病氣に罹つた時その妻が三島明神に自分の命をもちめて、夫の平癒を祈願しその靈が願ひ乗合の人は全部助かつたが忠常の妻一人だけは溺死した。これは妻が夫の身代りになつた一種の人身御供であつたので、日本武尊と神姫の美しい犠牲的話など半傳説的、半歴史的話することは申すまでもないが全然説話方もない作り話とは考へられぬ。特に大名が築城の際に、堅固の上にも堅固を期したので、籠工事の際に神秘的な人身御供、人柱の事實などが秘密裡に行はれたことなどは想像に難くない。封建時代の忠義一徹から死して護國の鬼となることを家門の譽れと心得た時代だから私には

## 一重櫓の人柱もす

得た時代だから私には

○平沙紀徳氏の文集を得たり幸に嬰心彼詩  
集と購ひ得たりを告ぐに、此集の和元年京都に  
て刊板したるものと、文集多し此集稀観に属す、三  
冊本を以て寶曆の年、長門瀧長愷肥後秋山玉山  
臨井太室の序あり、各詩秋井、木、龍、四氏の評あ  
り、木氏ハ其母言應君忠と云、藤原卷尾七人の跋あり  
平沙ハ嘗て長崎に在り一時詩書を修む、後延  
言ニ没歎するも、近人ハ其言を信ぜずと云、一此  
ハ皆修し、中甲斐あり、あま外に任詩多く、任言  
者の付、似す、平沙ハ不引、依んハ、病草あり  
日清行を誤つて霞後將國の用ニ世ニ七と云、其後  
亦望の誤つて奪ふ所と云、其の存する所の

門人の手紙に傳ふことあり、荒し門人の手紙無り、  
全部烏有と傳へせしるも、危かる、六月廿日  
あるなり

鏡醉

屋後琵琶の宮前石鏡山好逢烟雨晴不照  
鏡人顔

伏お送人還寄砂余亦將西中

伏お君先去鳥砂我欲過、作今秋色元、於及月  
吹多、

渡唐陵

客路何時極、舟行日轉長、秋風八月月、西上度  
陵濤

下関詞三首

東帰又西去、川浪晚催舟、姊妹新妝樣、相邀鼓  
高下橋

慈君霧離心の杯休叶、是聽舟人言、海門凡  
未好

忽報風潮好、新聲一曲、遲停、爭看打漁何  
日是前約

楊柳酒支笛

秋風楊柳滿、柳葉正紛紛、已感、歸、搖、後、何  
處、雨、來、步

七歌集

花白意原上、蒲條自憶、初、惟、名、古、歌、月、州

送或回春

思君思

宜得春、畫一夜、忽一夢、表、王、深宮、承、寵、高、特  
賜舞衣裳

少年行

青樓一夜、飲、燭、是、銀、裝、刀、千金、何、所、依、新  
識、五、技、豪

此等の行、何人、有、味、あり、而、し、七、人、の、多、く、平、沙、是、生  
ニ、期、待、せ、さ、る、也

○六月廿六日、去、お、こ、梅、屋、縁、多、托、の、日、也、京、都、上、賀、氏  
又、あ、る、祇、樂、江、卷、名、も、し、危、の、山、お、よ、切、を、賜、り、未  
一、輪、を、海、内、白、く、昨、日、偶、然、お、り、別、鷹、山、岸、先

悦寺より優越中、春成論といふ題名を親し  
く玉くす候、懐舊惘然、易に淋れ、子世を云  
く、同寺の古画帳に拙毫あり、こゝを以て  
ふ也。中川柳外、近き支那三石畫家倚  
一冊を寄せて来た、の清の書家、倚を以て  
柳外畫に鑑賞あり、此を卷末とあるす、又  
卷首に多く、備者希、同人、叔翁の清の画を収  
め、えん、赤絹、映に作し得べし、卷尾、柳外の  
題畫百卷あり、此人、七五律を著く、愛稱を  
一とある、此の偶々、河東、碧梧桐、生面の人  
の、古延、見、此人、以て、蘇村の遺蹟と、其、新、の  
拙、筆、一、つ、あり、余、に、就、て、材料、と、七、と、あり、余、乃、ち

蘇村の寒菊の改畫の彩色に、昔情を書き入る、更  
く、一、間、を、添、く、た、る、一、幅、を、毎、出、し、示、す、碧梧桐  
喜ん、て、全文、を、お、も、す、余、上、田、秋、成、の、茶、の、茶、歌  
を、葵、形、筆、紙、に、収、め、認、め、た、る、一、幅、を、出、し、示、す、秋  
成、月、渡、を、河、の、四、五、き、蘇、村、に、因、縁、を、お、も、す、  
と、り、て、こゝ、に、お、も、す、蘇、村、の、刊、後、某、寺  
の、關係、を、お、も、す、つ、き、余、の、河、に、冬、へ、て、後、を、お、も、す、余  
久、く、此人、を、お、も、す、其、文、を、讀、む、こ、と、多、し、余、碧梧桐  
桐、に、喘、け、る、其、の、得、意、の、句、を、採、り、ん、こ、と、を、お、も、す、  
誤、り、て、去、り、北、の、凶、年、之、業、作、乐、部、に、於、て、野、村  
梅、湖、(宣、次)と、内、存、久、寛、と、混、々、す、内、存、親、族、の  
貴、石、を、梅、湖、に、托、し、て、修、め、ん、と、す、也、梅、湖、ハ

余を同郡の人と改て五峯と丹系を同くす少少詩文  
あり、内容に及する不以也。又北征史料(枝露公  
の著)とある、此の編纂家の故吉田震卿(東伍)手  
を著けし成る多むとす。一也。又後、美舟高  
橋義彦多多くの資を投し二二の編纂家を托  
し数年、及び漸や一巻も上版未月五日をトし披  
覽の会を催さんとするに、後よりと、後よりと、後よりと、  
んじ就き高橋義彦外河原者らりの書長、續日棠  
頭こと、乃ち来り、高橋義彦と、高橋義彦と、高橋義彦と、  
りう炊と受くも也。 六月廿六日、幾す  
此の天啓：偶：縁因多きを以つて午後、らと香  
を焚き心経一卷を敬寄す、意：満すと表

七脱字無きとの傳うに、一もを得て、徳川際  
城居士の遺：挿けんとして、よ也、前日二三紙を  
試みて誤る、或、一字を逸し、或、一行十七字、増  
減あり、挿んぬこと、骨の折るよと、今更痛  
切、意難験す。

○徳徳中書あとの、蘭海、若法あり、五井、蘭海  
の、泡布、らう、如、め、読、讀、し、一、二、の、項、を、お、す

二月廿七日

高森昌允の歌、願、は、く、は、志、ぬ、る、今、の、心、に、は、は、多  
斗、の、身、を、得、て、し、也、お、ち、ら、う、と、詠、せ、し、也、凡、人、生  
二千、ら、は、是、允、の、わ、か、ち、ら、う、と、お、ち、ら、う、と、樂、し、と  
思、お、す、唯、夢、や、の、こ、と、ら、う、と、し、か、七、或、ハ、病、の



種々多、又い貧窮の基をなすをいし、充て後の法  
身、練歴して、一するすことにも巧者つき、身心の考  
とらふ、さんど行未久し、かく又、身七すくやか  
るる、筋ハ十分の十七なり、がし、もし此巧者つきに  
心見、二十ばかりの身、な成、さこそおせ、多く  
樂しかん、一かん、是に、なるるをいひ、心は  
さうそ、身の用は、さきか、唯先て得るのとが、ぬ  
と、さう、年の日、うく行未久し、人、このうたを  
き、き、す、す、こ、一、後のおせん、は、あ、く、大  
成、成、ある、い、し、き、

又左の記るあり

古名の申ける、我國、宋元の、能く、能く、書、書、の、基、の

あ、い、倭、寇、と、て、日本、の、不、逞、を、命、の、ち、か、ら、多、く、あ  
つ、ま、う、と、ぬ、れ、と、い、う、、東南、の、法、を、唐、滅、割、取、す  
其、所、の、守、令、ぬ、き、く、の、人、と、多、く、こ、う、さん、東南、の、日  
大、乱、お、こ、れ、り、此、時、に、書、書、無、物、多、く、奪、ひ、取、り  
と、ゆ、り、し、か、今、の、世、も、我、の、傳、い、ん、と、さ、う、多、く、多、く  
い、に、せ、お、也

又左の記るあり

推古天皇の御時、十野妹子を使ひて、唐にこのかはせる、  
隋の煬帝の時也、日本に、い、は、く、妹子をと、も、こ、し  
る、と、な、つ、け、る、蘇、因、高、と、い、ふ、を、見、え、り、是、い、ち  
子、と、い、ふ、を、唐、の、人、は、い、ん、か、う、と、い、ふ、と、文、子、に、因  
高、と、い、ふ、を、唐、の、字、い、ふ、か、し、少、帝、の、切、音、と、



朝のいかに之を装束に支へたことか觀つてあるから、  
おねめとおく、自今の長くは材料も多分の紙上現  
はる、いかにあつた、  
二月廿一日記

昨夜東京の梅園に開きたる四時會席上余一時間  
餘り、その時、秋宮爲夢談を話す、又大いに興をもち  
す、偶と皆友人石海、一を以て入るを止め、余  
席にありし余の談をきき、我余此の談話を  
つゝ追憶禁し得たるものあり、談話中、石海との  
同席中の一語を語る、曰く此の爲夢談、石海又、無  
交渉をきき、頗るきき、今も三十七八年前君と  
我、刑餘の人と董化の目的を以て一の目標を設  
けんことを議す、蓋し西洋に此の設け、吾人亦是れ

傲んとして、研究元、いかに七律、秋中のこと  
際と知ると、いかに五中業と困り、あることあり、吾人嘆  
曰く、世上の兵談、恐ろしく、事と皆馳せん、吾等も人  
の肉實地を認め、いかに要ありと笑つて已む、而も數  
年の後、余、回ると、いかに福雲の人と、幸、不幸、偶  
々此談を考する、あり、石海又、我を以て、餘、  
こぼれ、いかに、北、日、今、多、人、鑑、木、海、方、島、各、情、  
今、大、情、山、南、部、出、身、寺、崎、廣、業、友、門、の、人、也、亦  
席上、岡、八、節、を、聴く、曰く、いかに、七、と、廣、業、の  
妻、いかに、宮、園、の、廣、業、の、名、餘、田、花、といふ、其  
博士の末、立、三、法、を、得、く、園、八、節、一、中、節、に、似、  
こ、いかに、其、重、の、保、の、次、京、都、に、起、り、後、江、戸、に、行、く、事

あゝ余亦廣の病に應じ、後冊に控書して居る六  
 月廿八日

お化す三伝の當りて未改て左り穢をよりりる故麻  
 の子に此廿千人切りの怪談をよるるまゝを當りて  
 官由者の竹葉山某と思ふ、ゆゑに増すに  
 るる物儀を穢くすることあるまゝをいふ、今も  
 先と容も認めぬ、左り穢のおうげ思ひか  
 まゝあゝ、又受りけり

昔今の話題提燈也前回香取秀真鈴鐘の  
 談話をよりりる思ひつゝ、深題也何人七こん  
 とと思ふ穢をよりりるまゝ、今も別と考へてむら  
 け、体は思ひつゝ、一二の談をよりり、一八白



岸一覽東岸續き 西葛西郎生州理此與秋社業前生州理 隅田川向しは眞崎 水神

### 土壤悪化

「亡び行く墨堤」

幸田露伴

向島には、かれこれ三十年近く住  
 んだ。が、もう住むに堪えない。で、  
 山の手へ引越して来た。  
 實に酷い、第一に、向島の土地そ  
 のものが悪くなつてしまつた。土壌  
 悪化だ。梅が好きで庭に三十本も植  
 るて置いたのが、年々に枯れて行く。  
 柿も好きだつたが同じ運命。柿も  
 あんずも、松も、榎木と云ふ樹木、  
 庭樹になるやうな佳い木はみんな枯  
 れてしまふ。

生残るものは、秦皮や女貞木のや  
 うな、下らぬ植木許りだ。秦皮のや  
 うに、米國では道普新の杭に使ふや  
 うな下等な木は丈夫だが、少し觀賞  
 される樹木は、堪え得られない。

で丸ビドクなつた。尤も之れは隅  
 田に限らず、東京中の水が汚くなつ  
 たのだが、隅田のは殊に著しい。  
 私が覺へても、まだ、川の水で米  
 を洗つたり、煮炊をしたことがあつ  
 たものだ。  
 殊に、饅頭あたりの水は、徳川時  
 代には、茶の水に佳いと云つてわざ  
 く江戸から酌へに來たものだ、私  
 達の時代には、それほどでもなかつ  
 たけれど、現在のやうに溝泥見たい  
 なものではない。

鮎は、魚界の中で一番汚ないとい  
 平氣なものだ、その鮎ですらもう今  
 は江東一帯に居なくなつた。勿論、  
 白魚なんぞは居る筈がない。白魚は  
 佃邊で子を産んで、夫が段々川上へ

### 駒形堂の不如歸

高村光雲

隅田川の御話ですか、  
 一つそのほととぎすの御話をしま  
 せう、高尾の句に  
 「君は今、駒形邊りほととぎす」と  
 いふのがあるとは、誰方も御承知だ  
 が、私は歌仙の事には一向不案内  
 内だけで、そのほととぎすと駒形堂  
 とは、特別の關係があるんで、私  
 は駒形町の隣の町に住んでたから  
 能く知つてゐます。  
 駒形堂の寶形作りの家根、あれは、  
 もと、アガザで書いて、其上に丸太

川向ふの、本所の多田の薬師のコン  
 モリした竹園から出るのです。そし  
 て丁度この駒形堂の上を通つて、西  
 の方へ飛んで行くのです。  
 これが高尾の句と、どう云ふ關係  
 があるか判りませんが、兎に角私の  
 師匠高村東雲先生の家は駒形町の隣  
 りの諏訪町に在つて、私は、其處の  
 二階の仕事場で、始終今頃の雨降の  
 日なぞには聞いた事があります。  
 話が、一寸變りますか、此の諏訪  
 町、黒船町、から駒形迄の間には、  
 チョイ、其眞の距離と云ふのがあ

明治廿年位迄は、向島も僅か古い  
 面影があつた。それからは俄然と  
 して穢れて行つた。  
 加速度で穢れて行つた。  
 今の人間は、奇麗なものを汚なく  
 するところが好きだ。

雪舟探幽の繪へ、あとから、墨を  
 塗つたがる。  
 まあ、土も、水も、空氣も、みん  
 か汚くなつて、従つて、人間が汚  
 くなる。  
 只粉飾許りは、少し知つて居る。  
 (談)

國語會話

獄中舊夢談

市島謙吉氏談

以下は、六月廿七日、國語會話會席上で話された市島謙吉氏の談話筆記の要略で、紙面の都合で僅く省略した點があり、且つ市島氏旅行中の爲め原稿の繪圖を乞ひ得なかつた。若し誤謬等があれば、夫は筆者の罪である。（辭事記者）



市島氏小照

高田に行つて新聞を推して、その社長をして居りましたが、恰度其時高田事件といふものが起りました。元來此事件はくらの嫌疑から自由黨の人が四五人捕まつたのを大變に傳へられたものであります。とりあへず私はこの事件をしりに新聞に書いて居た。ところが此自由黨の人々が捕られた様子を載せた事がその頃、布された新聞命令に觸れ、殊にその中に「男長が干戈を弄するといふのをかんとを弄する」といつた事が可笑しいと書いたのが官吏侮辱罪になるといふやうな事で遂に高田監獄に收監されました。其後間もなく新聞の木監獄に送られる事になりました。さていよいよ車に乗つて出發するといふ時に大勢の友達が送つて呉れましたが、その中の或人が金を三十圓投げ込んでくれた。どうも金を貰つても行く先々では、警察の監視所泊るのだから貰ふ機會があるかと思つたが、兎に角投げ込んでくれたのだから丁度西洋の本を二冊買入れて貰つて居たので、それに換んで知らぬ顔で居りましたが、併し萬一これが露見でもすると面倒な事になるから、何となく新聞に行くまでに費

つてしまひ度いと考へ、送つてゐる調査に一晚だけ普通の宿屋に泊めてくれと無理に頼んで、やつと長岡の見苦しい宿屋に泊めて貰つた。そこで酒や肴とある限りの贅澤をして夜晩まで飲んで居たのですが、何故か安んじなさいの事だから到頭十五圓しか使へないのでした。さて新聞に書いて居たが、こゝに私達にとつて甚だ不幸な事が出来たのは、今度の事件の被害者たる高田の署長が新聞の編輯に責任して来た事です。此人がそれは文字通りかんとを弄する奴など、遂に私達をいじめ、そうして或場合には恩を賣らうといふ考へなのだから堪らない。約三ヶ月許りといふものは砂を握がせられたり、その他いふものはかりせられて随分苦痛をなました。が、今度は裁判の都合で長岡に移される事になり警察の手に引渡されました。警察の留置所に一夜泊れられましたが、其夜は連日の苦しみで疲れ果て居ると夜中に一人の男が破獄を企てゐる、之には私も驚いた。さういふ事を今晩されたのは、こつちも連累の災難を蒙つたから私が立つてからやつとくれと云つたが見逃して呉れといつてきかない、どうも争つても仕方がないから、じつと見て居た高田の新聞に、今度私が幸ひに今少しといふ所まで小便か何かに燈をつけて来たので遂に目的を果さないでしまいました。その翌日新聞を立て長岡に送られた。その時は勿論汽車も無い時だから長岡迄汽船で或調査に送られたのですが、其人が大變親切に遇つて呉れて非常に嬉しかった。

それからだん／＼高田にはいりこゝの警察で久しぶり新聞を見ましたが、その時恰度今の公使館子男を起めた時で、いろ／＼な人の名が載つて居る、ところが私と深い關係ある大隈さんが出て居らん、實に政府といふものは不埒なものだと此時なんでもかんでも政府に反抗する氣になつてしまつた。さういふ事で、高田に送つた所がこゝは私として非常な事であつた。といふのはこゝに警察をして居る大野とといふ人は私の縣の人であつたし、その外縣廳などはほとんど越後人を以て一ぱいになつて居るやうな體で總てについて大變具合がよかつた。私は早く決着になつたので、未決監の方の仕事もしたので、いふ所、送られも出られるからといふのでそのまゝそこに置かれるといふ風でした。すると或時典獄から私を呼びに来た。行つて見るとちやんと席をもうけてほとんど贈等の禮を以て、私は貴郎の書いたものを讀んだ事があるが、貴郎は監獄の事に大變御愛しい様子、あれだけの事を御承知なら私共のために講義するなり、著述するなりして致して貰ひたいといふ。これは石渡君と二人で大學の同窓時代に監獄について、いろいろ研究した事がある。その當時、徳田君と重直さんが初めて監獄といふものを講義せられたのです。その講義の筆記を私が持つて居たのでそれを高田の新聞に自分の眼の如くして毎日連載した事がある。それをこの典獄が見たんだから感心したに相違ないところで私も研究したいと思つて居た際です。



國語會話に於て 宮園千廣女史(左) 宮園千秋女史(右)

から、それでは一つやつて見やうと云ふので監獄にある雑誌などを入れて貰つた。それから其時に典獄に向つて私はもう決着になつて居るんだから此上未決に居る事はかへつて辛いから早く正規の所に送つて貰ひたいといふので、すると典獄がさういふ事ならいふので既決房に送つた。そこでいろいろな珍談があります。監獄には職役所といつて囚人に勞務をさせる所がありましてその人間相應の仕事させる事になつて居りますが、私はまだ何をすると定めて居ないでほんやりして居ると信州小諸の大岡某といふ富豪の息子で放蕩の結果詐欺で何かで入獄した男がやつて来て私に高田の方をやつて居るがここに御出なさい、さうすればあなたは何かもせぬでよい、其代り私に外國の本を致して下さいといふ、そこで其男に智恵づけられ如何にも意圖が出来た様な風にして其男の側で仕事する事にして貰つた。だが私は別に仕事もせず、いつも監獄にはいつては高田に使ふアルコールを飲んで居た、するとそれがだん／＼わかつたと思へて、どうもあんな中からアルコールの使用量が減つたといふので、或時などは晴室にはいつて見るといふ、見られ

ては大變だから今戸を明ければ全部薬がなくなつたが、いふかといふ様な事でやつと喰ひ止めた事もありました。マ博士の親分で早川富五郎といふものがはいつて居ましたが、これが私に本を致して下さいといふので毎日休みの時間に致して居ましたが、この富五郎の部下に屬する博徒連が百人から監獄内に居ましてこれが自然に師事するといふやうな事で私は大變何かにいつて樂であつた。所がこゝに一つ問題を起さうとしたのは例の十五圓の金です。その後使ふ事も出来ず又使ふ必要もないのでそのまゝに持つて居ましたが或重大囚人が生命に懸けても貴郎から買つた事は云はないからといふのでくれてやつたのです。するとそれが金を持つて居る事がわかつて大變賣られた。私も大變心配したが感心な事には頭私から買つた事を白状しなかつた。監獄にも正月の三ヶ日はやはり休みがあります。此日は看守等にもなるべく休ませるために大きな講堂に千人許りの囚人を一しよに入れ、僅かの看守で圍らせて置く、所がこゝに不良の徒を一ヶ所に千人も入れ三日間も置くといふと退屈してどんな悪い考へを起すかも知らんといふので三ヶ日は芝居や角力や囚人にやらせる、それは大變なさわぎで囚人としては此上ない楽しみです。それから監獄に新入生がはいつて来るとみんなが世間の事を聴きたがる。殊に大敵か特敵かいかといふ事を第一に聞きたがる。或時など新入生に大敵か特敵かいかと早速聞いたら私の所は氷川神社ですといつた、これにはふき出した。さて其後、私が出獄する事になつたがそのときに富五郎等によつて送別會が開かれた。これは酒こそなかつたがなつかしく盛會であつた。又或男などは御れに別に送上げるものがないから詐欺の秘傳を教へるといふやうな滑稽もありました。まだ種々ありますが此位ので結構で置きます。

月井公記  
此は三信の當りて未段で左り福をよりを收束  
の子に此女千人切りの怪談を思ひ出すものも當り  
官由書の竹葉山某の思ひ出す幼少の怪談  
まゝあゝいふ又あゝいふ  
昔今の話題提燈也前回香取秀真釣鐘の  
談話をもつて思ひ出す思ひ出す思ひ出す何人七二人  
おと思ひ出す思ひ出す思ひ出す思ひ出す思ひ出す  
おと思ひ出す思ひ出す思ひ出す思ひ出す思ひ出す  
十二行

3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34



### 土壤惡化

#### 亡び行く墨堤

幸田露伴

向島には、かれこれ三十年近く住んだ。が、もう住むに堪えない。で、山の手へ引越して来た。...

### 風致破壊の

#### 新隅田公園

無趣味の當局に 一言す

復興局で決めた、隅田公園の設計圖なるものを見した。...

### 駒形堂の不如歸

高村光雲

隅田川の御座すか、駒形堂の御座すか、一つそのほと、いきすの御話をしませう、高尾の句に...

即ち其處には、昔の隅田川と云つた様な優雅な、露酒な、自然美は、全然破壊されてしまつて、川上には...

川樂家の遺訓に、白河の町民も敬え鐘一響と、此に各町の壯丁大中士の提灯を執り隊伍整...



就中、龜井戸邊が一番面白い。これは、云ふ迄もない。土地と云ふ土地が、みんな工場になつてしまつて、煙突から煙を吐く、悪水が流る處に流る、而もその悪水の抜け道を、みんな閉塞してしまつたから、だんく土へ浸込んで、土壌が酸性になる。つまり土地ごと、向島は亡んだのだ。

若い木で、根が深くない中は、保つてゐる。少し年数を経て、根が深くなつたものは、地下の悪水に犯されて直に枯死する。仕方がない時だ。

昔は、吾妻橋の上から、遙か川上の白鷺の邊に、大きな樺の木が望見されたものだ。之は陸軍の地圖にも出た向島の「樺木」だつたが、勿論之れも枯死ちやつた。向島で有名な樹木はみな枯死した。有馬温泉の松、其外みな枯死した。川の水も汚れた。僅かの年数

上つてくるものだつた。丁度櫻の咲く時分に、成長し切つたのが、向島で、例の白魚網とれたものだ。浮世世帯などは、篝火を焚いてる圖があるが、向島邊では晝間とれた。現在、隅田川邊で白魚網でも持つてるものは、風には喰はれてポロクになつてゐるだらう。

### 風致破壊の

#### 新隅田公園

無趣味の當局に 一言す

復興局で決めた、隅田公園の設計圖なるものを見した。吾妻橋から先きを、公園地帯にするのは、當局としては大英断だらうが、夫を言問の少し先きで、止めて夫から先きは、例に依つて例の如く工場地帯にしてゐる。それから、水戸邸の附近へ、幹線道路の通する大鐵橋が架せられる。斯くて出来上つた隅田公園なるものを想像すると實に大したものだ。

竹で、鉦なもので、例の濱川成が宮戸川から上つた御音さまの御詞を作る時に、十人の童子が、アカザで家根を作つた夫が駒形家の根本の形なので、その寶形家根の上を、丁度ほどとすが往來するのです。どう云ふ譯で、彼處に限つて、ほととぎすが、飛ぶのかと云ふと、そのほととぎすの行く先は判らないが、出る所は判つてゐる。出る所は、

即ち其處には、昔の隅田川と云つた様な優雅な、露酒な、自然美は、全然破壊されてしまつて、川上には煙突が林立して、煤煙が濼々と流込み、一方には櫻の土埃へ、近代的な化物見たいな鐵橋が、しやばり出て、其間の猫額大の地に、僅かに公園と云ふ名目だけの土地へ、三圓たの長命寺、牛御前だけの竹屋の渡し、橋場、今戸と云つた傳統的の名所が、昔とも今とも附かぬ變な形ちで、保存されやうと云ふのだ。

對岸の山の宿邊り、公園にするのが、大層當局の御手柄らしく吹聴されるが、之れも例の近代式の煉瓦とセメントで固めた護岸工事然たる岸の上へ、チョンビリ草花が何か植込んで、白いベンチと、小供の遊び場でも設けて置けば、それで公園の能

りまして、この船宿が中々呑氣なものです。先づ此邊から舟で乗出して行く先きは、南は、江戸向きの方へ行き、北は、山谷へついで吉原へ往つたり或は向島邊へ船遊びに行くのです。が、家根舟、猪牙舟、それに馬なぞも、時には棧橋にもやつてゐる。舟宿の作りは、料理屋とも又違つ

事了れり盡せるものが出来たら、現在よりもつと情なくなる。わざ／＼高い金を出して住民に迷惑させて取拂ひなんかするより、沿岸の家屋の構造に風致を破壊せぬ様な制限を加へて彼處は、あの儘普通の向河岸にして置く方がよい。

第一の問題は、川上の公園區域を少くとも、小松島か對岸は眞崎邊迄延長する事だ。之は少しでも隅田川の風致を考へるものが、當然思附く事だ、川下の方は放任して置いて宜い。こんな見易い道理が考へられぬ市當局の頭の悪さは殆んど個笑に値するが、黙つては置けない問題だ。願くは大金をかけて、風致を壞すの丈は止めて貰ひたい。(桐谷生)

川樂家の遺刺にうら白河の町民今も敬え鐘一響を  
とれと各町の壯丁大中士の提灯を執し隊伍整心  
然吐嗟行列を尋し町心づかふ道の湖水を更  
すすお習儀あることを誇り提灯行列早く楽  
節の時よりあつたらう、次は長崎の年中行事に  
中元は降し焔燭の影ををるすお習儀ある  
ふ暮前に献燈の為めするものもて大家の  
焔燭の多きを誇り風を吹し海中元の備  
有莫大なるるる笑を誇り、又海を岸山鉦子  
みねいなる陸境の主人岸山鉦子あつたか  
中元前も祭り提灯を心づかひて山岸山  
の日記の傍を録するを見、其終の記に書

を求め、山歌の如く、画し、今、日記の某  
家に秘蔵せしむ、其書、一稜体漢行燈の火  
を清すの圖、を神来煥書の名といふ。

○昨日日本橋東美供所部を令訪すと、都下贈答書好  
の書、籍印、夏合、あり、早稲利、息、例のこと、と、坊、と、書  
る、と、多く、の、圖書、海、列、し、あり、は、な、る、平、生、の、保、の、如  
く、通、る、を、例、と、する、四五、の、お、店、も、何、も、さ、る、く、他、の、疎、を  
する、お、店、の、列、を、就、し、ま、ら、通、り、ひ、ん、む、い、る、物、も、と、目  
を、と、備、ち、へ、き、この、或、人、と、さ、り、備、え、ん、二、三、氣、の  
の、せ、る、この、を、贈、り、て、や、い、せ、お、め、左

一 曾我物語

十二冊

寛永の略、を、版、式、所、志、紙、に、推、故

あり

一 壽貴全大帳

稿本

一冊

為永春の、自ら、稿、を、こ、家、為、程、彦、京  
山、馬、琴、の、の、福、を、あ、る、も、春、の、を、得、る  
い、初、め、也

一 漱芳閣題跋

一冊

浅野梅屋、自ら、稿、を、こ、家、為、程、彦、京  
跋、を、及、り、友、物、堂、舟、乙、骨、耐、軒、の  
地、黄、あ、る、の、喜、あ、り、し

一 田光大師勅令式取回

二行

二冊

田光大師、六、百、年、の、折、勅、令、式、を、り、其  
際、刻、する、本、の、略、圖、冊、に、行、る、後、五、十



年更に勅命式ありし際、四版を刷行巻  
尾別に寺境内の圓三枚を添ふ、此  
三枚冷名爲恭の著書に傳ふ、元亨  
三稀に兒皇、幸に新田二書を保せ購  
ふを得たり  
六月廿八日録

○福宮縣三潞郡若津港西濱町若井料主と  
いふ人、一問別業未だの人也、頃余が寺尚故  
味のものを実業日本紙上掲げありしを見  
し、その所爲の古文書一通を余に譲り、以し  
その文を尋らう、その古文書、南池武光の御書と  
堅一尺幅一尺三寸八分とあり、此の文書の此家

傳りし所、以て若井の祖先は南池の一族と武光  
此後方面を陣中、肥後の守藩代を勤め  
るなり、而時武光も軍政上のことと関し、若  
井に歸りしなり、前年史料編纂所  
より傳見せし入る、字をいふこととあり  
その際、池田家の御書、此の添ふ、本書あり  
見えんと、確り、そのおも、此の若井  
壽永二年三月州頼朝より南池瑞後守の紙  
行の丸行、平形、(字)七葉、(字)添ふ、  
又男奇勲、池田臣の御書、武光の甲中、其御  
の一事を著し、おも、そのおも、若井の御  
書、その方体花押、全く同しとあり、若井の家

よの家書にわきまなきも炭坑行きの漫を以て  
以て免るや却りしとの言もさう自ら言ふに似し  
き念も無けんも、此状の要の略と書きつけしめ  
六月廿九日

〇多の教東中津田の書房に於て在の書を得たり

一富岳志とい

一帳

北書小泉檀山の書する所、富嶽回志中冠  
冕と稱するもの、巻首藤崎公宗の題あり  
又あ積良高の序あり、巻尾賀来惟俊の跋  
法海春景の和又の跋あり、回寸ある名流の題  
あり、曰く河内洪園曰く中村栗園曰く森田三  
曰く河内極楽、檀山の自叙、振ると登山狀の

十二行

河島雲圃とあり、偶々、お府主原小松山  
茶田、同じく登山狀とあり、又曰く此  
回書つる比の河内洪園を經て天鏡に入るとあり、檀  
山の印に「常經天鏡」の文あり、巻首二枚龍  
華寺とあり、富嶽を記するの回、島王淵の記  
の所、檀山の記也、畫圖の目如た

二富士山南面從支原野到十里木村全圖

二和田村コンテニカ洲(熊田カ)

一絶頂全圖其一

一絶頂全圖其二

一絶頂全圖其三

一十里木村人汲水戴頂之圖

- 一 自和田村至十里木村圖
- 一 和田村全圖
- 一 從須山五十步而仰老又頂凸者五及雪四
- 一 同上見頂凸者七及雪四
- 一 須山村の童子清義花巻詣之人圖
- △ 一合目木王夜中三圖
- △ 一須山口到絶頂三圖
- △ 一五合之上六合之下俯臨峻色圖二枚并
- 一 九合目略全圖
- 一 絶頂略全圖
- 一 霹靂凡雷震須史吹卷圖又一
- 一 自河走下到林森見島上三峯圖

一 下嶽蓮山凡圖又一  
 △ 一 其二 三

以上法圖の内△印は皆大心珠と筆力を足る  
 四十数年余登山祇跋渉の跡歴々一  
 帳の目々尋ねてし、余臥おて世をんとして嶽  
 の圖を賭つて既に四五の家持となり、而して未  
 此此帳を獲る所の事を遺傳とせり、今日幸  
 こ之んを獲る敢て帳を記し、所以也檀山の北  
 國を穿する弘化年間あり、島玉淵の檀山の  
 門人也檀山の持と香魚を画するの如を以て著  
 々人に知らし、是利の人也

大正十四年六月九日録

此身物ねの人こそ曾我部某あり、面獄の如く在り常つて  
人つて種山此園を出版するの苦心をゆえきることあり  
り今も忘却しや、更なるべき得て補綴を勤むるも  
いふ

○岩崎家の家度古法を主採する相傳徳一と云ふは若  
昂川流の投籠一志を穿せしむる此人此の如く亦あり  
こととを如く知り、余探遺への外漢をんんんん  
後を聴くいふあり、此も多々実験家の法を其  
法に、<sup>推察</sup>素を傳へて、無きことあり、而して魚  
の性を説き、海苔の如く及ぶ、ふよの漸修、過るを知る  
法、傳へ過る、お歌も傳へる、湘原、取船、過る、  
おのこと略し傳へる、交り、お歌も傳へる、  
十二行

以て以ての具と云ふは、是の余あり、思ふ、是るを目  
的とせし、國者多々、味家、これつて、傳へる、  
して是るを目的とせし、此に、作書あり、吾ん、此  
に、柱と云ふ、  
六月廿九日

此者中より多く、おの、徳一の、後を、ぬめ、あり、  
是を、覚ゆる、其、法、流る、今、の、山、流、の、久、  
男が、重、量、あり、編を、振る、こと、長し、  
一、天、品、と、傳、え、ら、る、  
一、鳥、を、

併、同、も、日、本、と、同、一、の、投、籠、の、事、を、  
併、傳、へ、投、籠、の、事、を、工、へ、  
小、盛、人、に、ぬ、を、取、り、  
一、鳥、の、名、に、

とらふ。

○今月八日、自然石の大研を寄せて来る海間  
三云々

硯一面並上り、墨屋の酒造の石を寄り  
中倉へくわせし、麦屋の宗耕一印  
（号不早）とす。彼の地へ石を携へ  
ゆると自ら刻し成す。よまそ、又那  
敷度並び波地を七硯の市中に仕し  
て衣倉らし、硯に平とす。去来する代  
米とす。車ある在る、若くは硯の短歌を  
かの短歌の批評をもも多め、あんな  
る。と海川玄身、の支那書局の者た

論の部もあつた、手傳ひを、様子こころ  
石の、おあのもの、候、海試用を、て  
幸甚、と云ふ。

北研背面に刻者の銘を刻す、不早の二字を  
えり、墨を磨し、試み、石の、稍硬なる日  
本石に、後るを、えり、  
六月三十日記

○桐島の品川湾の投石を、後人が、初めを、知り、得た  
ことか、あつた、海苔や、糸上、交の、こと、と、就  
聊う、えり、と、云ふ。

海州海苔、千葉県、の、産、総額、約八  
割を、占め、おる、と、この、重要、物、と、云ふ、若  
し、海中の、淡瀬の、木石、を、自然、附着し

此を竹竿をさかして干しあげたものである  
竿まが、その家が自れ丸味を持つて丁方の人  
の髪の時向の形であるといふ、あつ時島の海苔  
と稱し徳川家にも献上した、海苔をすいて  
作りやうとするに、後のことである。

海州が若し青地であったら、今もその地名  
を冠してあるが、海州は海が広しと埋め立て  
たに、北は海州、西は西海、南は南海、東は東海  
と至つたといふであらう、現に大森の海苔事業  
者の先祖が海州から移住した者が多いこと  
は、大森の寺の寺の云帳を調べれば、  
の証はつてもよい、海苔の製法と紙すき

其の似たりは、深い関係がある、所謂海草  
紙の起源も保たれてゐる。

現在海苔の産地、用ひるものは、品川湾内の  
浜面積は約百七十萬坪で、産額は一五、七、  
六、百、萬、圓、といふ、前掲東  
京府の海苔の八割は、此

海苔の附着材料として粗朶を海面に懸置  
す、此粗朶の木と竹とを用ひる、今、竹を用ひ  
て、市井の材料を用ひる、此の粗朶を、  
あつ時島の海苔場のお深さ、此の粗朶の尺七、  
粗朶がある、海苔の一日八尺を、最も、四五尺  
を、粗朶とする、葉を用ひる竹の、

年二十萬月二上とのいふ

海苔粗末をまきこつに移植と地子の二ツの方法  
がある、移植といふのは最初海苔の種を元々の  
溝を他物の海苔をまきこつ、四十をとりぎ、又本  
来におつたを、地子といふのは最初から本を  
まきこつたふ、おつたの地子の方が良い、

溝の是れ方、就ては振り棒を以て海苔に穴を穿  
つてまきこつたの溝の所へおつたを穿つておつた、  
といふのいふさ一尺から六尺迄各程あり、橙果  
が出来れば脚立の如きもの、おつた部より重味をつけ  
こつたもの、石が縛りつけられたる

海苔養殖漁情、牡蠣、蛸、松茸の捕獲、とある地

千のいふ(者)とあるさんてある、大体左の七件を必要  
とする

- 一 遠浅な干満の差が大なる所
- 一 産後の泥砂文が少く堅固なる所
- 一 河川の注流に依り流石の分布良き所
- 一 潮汐の疏る(良なる所)

海苔の生育に就ては陸上植物と同様、窒素、  
燐酸、加里の三要のものが必要であるが、加里は  
海苔が海苔を食するに食するに食する、他の二要  
素の他も、肥料を受けぬ、さういふ  
大都今も、昔も、河川の流石多量に地  
二素を含有するから、江戸の名産として地





陸上事故ハ物件被燒とらう左しんことをうめが  
 水上でワ誤ることも何れも何十番目の揚子江ハ  
 珍しくさうの硫酸アンモニア鹽砂糖硝石ハ  
 ハ入つたが最後、全揚子江へ歸してさうふ  
 水と陸との輸送比率を比較するん（二）三三年方  
 の統計に依るハ揚子江から出入する貨物の年々  
 約七五万トネ噸あるが、内三三万七千五百噸ハ内河  
 に入り、残り四一萬二千五百噸ハ陸上輸送  
 である、陸上輸送ハ少量であるが輻輳して尺ある  
 の、人が少く船の操縦を司る奴はとて、一陸上  
 の輸送機械が小型である以上、自動車の

十二行

が十一番大型で二噸半であるが水上の輸送機械ハ  
 小馬船が十二三噸の積載、大馬船は五噸半積  
 載、二三十噸と積載、おのれもさういふ船頭ハ皆一人に  
 二、

此の中ハ米酒の多きを説く中、麻絲ハ酒を忌  
 むとあり、酒氣あるものは口を酒の後の目の眩れ  
 を食ひ切ること、さういふ後、其後、酒は  
 徑夜を麻ハ酒の敵ハ味方、未だ解く得ず、酒は  
 一資料とす（一）

〇元禄八年、為行さん熱海の案内記を稀とて  
 するものもある、坪内道違の三風で熱海の焼波の丸  
 見、北の案内記中の園を採つて瀧園三翁に伝へて比  
 のを免ると一程の改味を乞へる、改は複製元の  
 山田か摺屋のものと彫るべし、一枚摺つて貴  
 らつ江のを爰に収めざるべく、元禄頃の熱海の様子  
 も知らぬ、殊に熱海の土地に版入しとある點も  
 十しあつて、園に附帯するものも又言と冊中の  
 他の部分のものを取らざるべしとある  
 為コロタノ、改と附しに画行一枚を添きよぬめ  
 おく、こんど三田の茶の画行が浪舟の攝  
 兩院のから三田にえとる包み紙を利用し

稿を属しに所々為茶儀款が自れあるありしを云へ  
る楠公汰別の園心ある原を考考し縁あり  
る不坐華の所存あり前月考考の百人一首を  
改行し然れども既に借属し七領の筆せありとの  
が年後にとりたれと復た人々の山回の法がある

七月三〇日

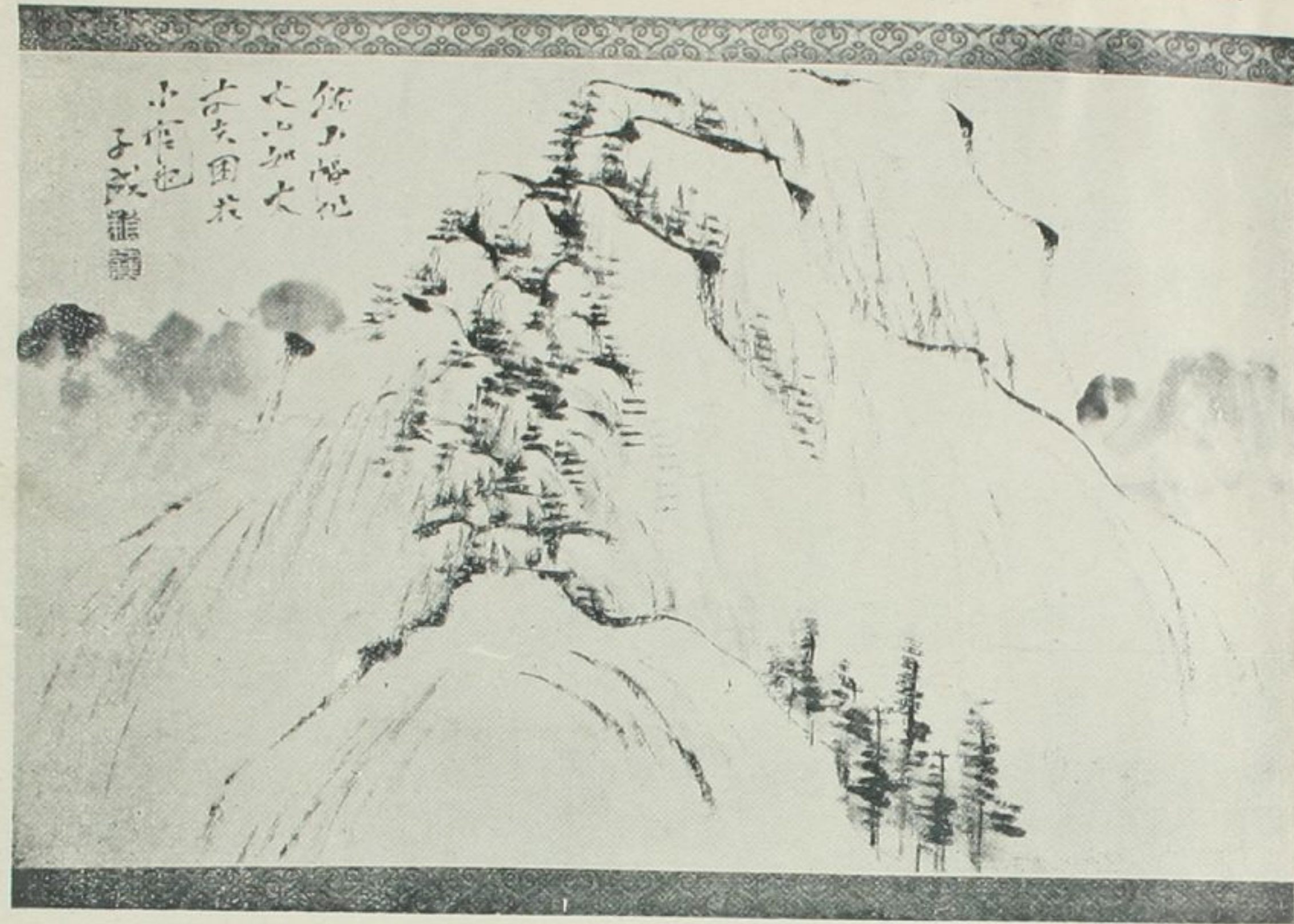
五峯與桐陰の印二款五峯後後  
余の筆中見の物とす此の印既收致に取  
るに概南手批の故とあり 乙丑七月四日

○高松奉石の寸絵意冊を煮りし未るものあり  
購ひ入る一帖山水を畫し一帖果蔬を畫す此と  
あかの尺改あり此人九十九里の商家より取て  
画家を以て位するものあり故に巧むるものと云ふ  
氣ありし余前年一帖の寸絵帖を獲改し一帖を  
中る花より更に二帖を贈ふに勢に似字と名を此種  
よの取て其多のきを好む所とす也 七月四日讀す  
為記す奉石時に巻石と後款す今次得るに

二恍惚ニ然リ而シテ印ハ皆墨石の字を刻す、音  
 通を以テ時ニ卷石と号シ、号歟度、度丁外の  
 筆也

○前日購ハ得テ富岳宿舎ニ出シ閑ニ楽ムル也  
 況ス、檀山の筆は頗ル洋風也帯シムルことを觀ル原  
 来此人畫する所の香墨頗ル宿舎ニ其の顔料の  
 藍のことき他の画家ニ異キ特色あり、何人も之を見テ  
 洋風の感化ありと有キ、其の氣付カセリ、無クシテ今此  
 富岳の圖を見テ、まさしく洋風感化の深きを感セ  
 テ、然ラズ、其の和田村ニシテ、湖の高原の如き、和田村  
 今四ノ中の高原のことき、浪山村の高原の如き、洋畫  
 ニ酷似ス、所アリ、其合ニ上ニ合の下、附臨、渡り、湖

の如き、其に油繪の如き、洋風の如き、亦洋風  
 也、諸國中一ヶ所筆、彩色を加ケテ、不、即ち  
 富岳南面、從テ原到テ、里木村、同中の河海ハ  
 藍白、從テ檀山特徴の、靑、摺、の、難、ハ  
 乃、乃、の、か、故、行、後、氣、付、テ、の、補、筆、ナ、リ、  
 其、の、何、人  
 之、を、知、ラ、ズ、ト、モ、決、シ、テ、他、人、の、補、筆、ナ、リ、  
 此、の、何、人、  
 行、者、を、直、宿、シ、テ、ラ、シ、ク、思、フ、ハ、蒙、テ、此、の、  
 軒、一、糸、ニ、筆、者、の、者、存、シ、テ、見、ん、ハ、  
 味、故、也、も、を、元、カ、雷、火、檀、山、が、あ、る、人、ニ、  
 此、圖、を、取、ル、也、  
 外、向、坊、百、ニ、出、シ、事、あり、  
 其、人、の、談



賴山陽自畫自讚  
 大丈夫困於小官也  
 小官也  
 子波多野承五郎

又授ふ首端の圖二枚ハあ積らるるの巻紙を江  
 ニ彫刻し年数を経て漸やく出来せる由叙しあつ  
 他ハ目上方に柱を彫刻しなやまの段成るの後  
 此を又物とみさせりしもの、後にお替の字を若干  
 其年をせしめたりと云、余ハあの時若く者同を  
 ばす、今に書作に懐けて天也河なるし、何んぞ  
 七北者の海布の事、其れめりき、あつて、  
 彩巻の病葉と云ふも略々推測し得し  
 日東頭と後多野承五郎の言葉、旅記巻首に在る山陽の  
 畫を掲げ、松若地を其の二節を引く、此畫は當時  
 して及人寫し正せの巻紙し所也  
 七月六日記

市島春城氏著『隨筆賴山陽』の書中の一節に曰く。  
 『山陽の如くに文章に達し、殊に小品文に長じ  
 たものが最も妙に入るのである。  
 茲に差し當り想ひ出つる一二の例を挙げれば  
 友人所藏の山陽の山水畫は美濃紙一枚位の小品  
 で、滿紙を山水のみで埋めて、殆んど餘白のな  
 い程である。其處には斯く題してある、  
 就小幅作大山、如大丈夫困於小官也  
 これらはホンの戯れに書いたものだが、畫に  
 藉りて心事を告白する所に題贊の精神がある。  
 題贊は斯くあらねばならぬ』云々。  
 その山陽題贊の一幅が本誌に山陽研究を連載  
 して居る波多野承五郎氏の手にあるも亦面白い  
 因縁ではないか。

○馬橋義彦の年表の北城史料第一巻成り、四  
東台抄巻軒に二千餘名の人を収めし、後夜の  
定あをいへり、今之人を習けし物に軒礎す、其  
者石屋三上老田法之（世孫）入洋北侍士に外  
に北城出身者若菜千花、中山三州社編輯者  
才也、拙室に成行の原書を推積し、未合者に  
示す、今も後三先の経歴を誤し、法之侍士傳  
寫本を撰として編纂の経緯を記す、石屋子の撰  
抄のとき今もその三上入洋法之の文に二條の  
漢文を為す、今もその法之の文に十餘人者に聖  
と不有、法之の法之中故法田東伍が為、後前  
十日法之を記する、前一二の列を記す、  
北城史

料の編纂法にせし細叙せしことを少き感概  
禁す、然りともあること、古田の深く此の編纂を  
意とし、其別略と死後の事を記し、又似る  
時の末四の神任衰弱の極に達し、氣力合  
後見に見へり、その後を撤す、その新説の言に  
也、三上の多くの例を引き、後後より一下くせ  
ある人物、**中**の**法之**を記す、其の「歩」述を  
城後ハア、又系の種族に属する、其の「歩」述  
る、信義を重んず、天孫の如く権謀術数を  
とせりと、**法之**の事、其の「歩」述を吐く、北の史料ハ五巻  
若くハ六巻を以て終りを告ぐ、**法之**を記す、大書也、此  
の編纂者の以て、**法之**の改に注を記す、今第一三四

第何にせむ、折角に切成るも願布其法の望しき  
を得んば、或は思ふに十数年の品を徒すべし  
せんことを、金切に合衆に後援を乞ふ所以也七月  
六日記

御里乙の乙寶寺、<sup>（けり）</sup>後、<sup>（けり）</sup>在り、<sup>（けり）</sup>右利の一也、其の  
縁起ハ丹鶴甚かに收む、而して人或は、<sup>（けり）</sup>後、<sup>（けり）</sup>乙  
寺の縁起とある事と為す、非也、今乙寶寺に  
此の縁起の原を尋し、在り、文晁の住りたる也  
余未だ之んを元とん、<sup>（けり）</sup>高橋義彦の傳を  
尋く、<sup>（けり）</sup>文一兼に元且に嫁し、<sup>（けり）</sup>文晁の女  
の手で成り、<sup>（けり）</sup>文晁の業す、<sup>（けり）</sup>不といふ  
逃没の文晁也、<sup>（けり）</sup>の持たる粉を、<sup>（けり）</sup>據り

ありとあり、丹鶴本に比するに、<sup>（けり）</sup>多ののち、<sup>（けり）</sup>あり  
といふ、<sup>（けり）</sup>文晁家庭かあり、<sup>（けり）</sup>事、<sup>（けり）</sup>ことと思ふ、<sup>（けり）</sup>（ハ、<sup>（けり）</sup>谷  
家の新記を、<sup>（けり）</sup>こゝに、<sup>（けり）</sup>奉納と思ふ、<sup>（けり）</sup>或は、<sup>（けり）</sup>同  
あ時の村上、<sup>（けり）</sup>梁、<sup>（けり）</sup>あ、<sup>（けり）</sup>因縁あり、<sup>（けり）</sup>文晁を  
し、<sup>（けり）</sup>と、<sup>（けり）</sup>あ、<sup>（けり）</sup>と、<sup>（けり）</sup>然り、<sup>（けり）</sup>と、<sup>（けり）</sup>んば  
題、<sup>（けり）</sup>何、<sup>（けり）</sup>記、<sup>（けり）</sup>あ、<sup>（けり）</sup>へ、<sup>（けり）</sup>く、<sup>（けり）</sup>家、<sup>（けり）</sup>度、<sup>（けり）</sup>の、<sup>（けり）</sup>寄、<sup>（けり）</sup>入、<sup>（けり）</sup>る  
書、<sup>（けり）</sup>を、<sup>（けり）</sup>す、<sup>（けり）</sup>（き、<sup>（けり）</sup>ま、<sup>（けり）</sup>あ、<sup>（けり）</sup>と、<sup>（けり）</sup>る、<sup>（けり）</sup>似、<sup>（けり）</sup>たり

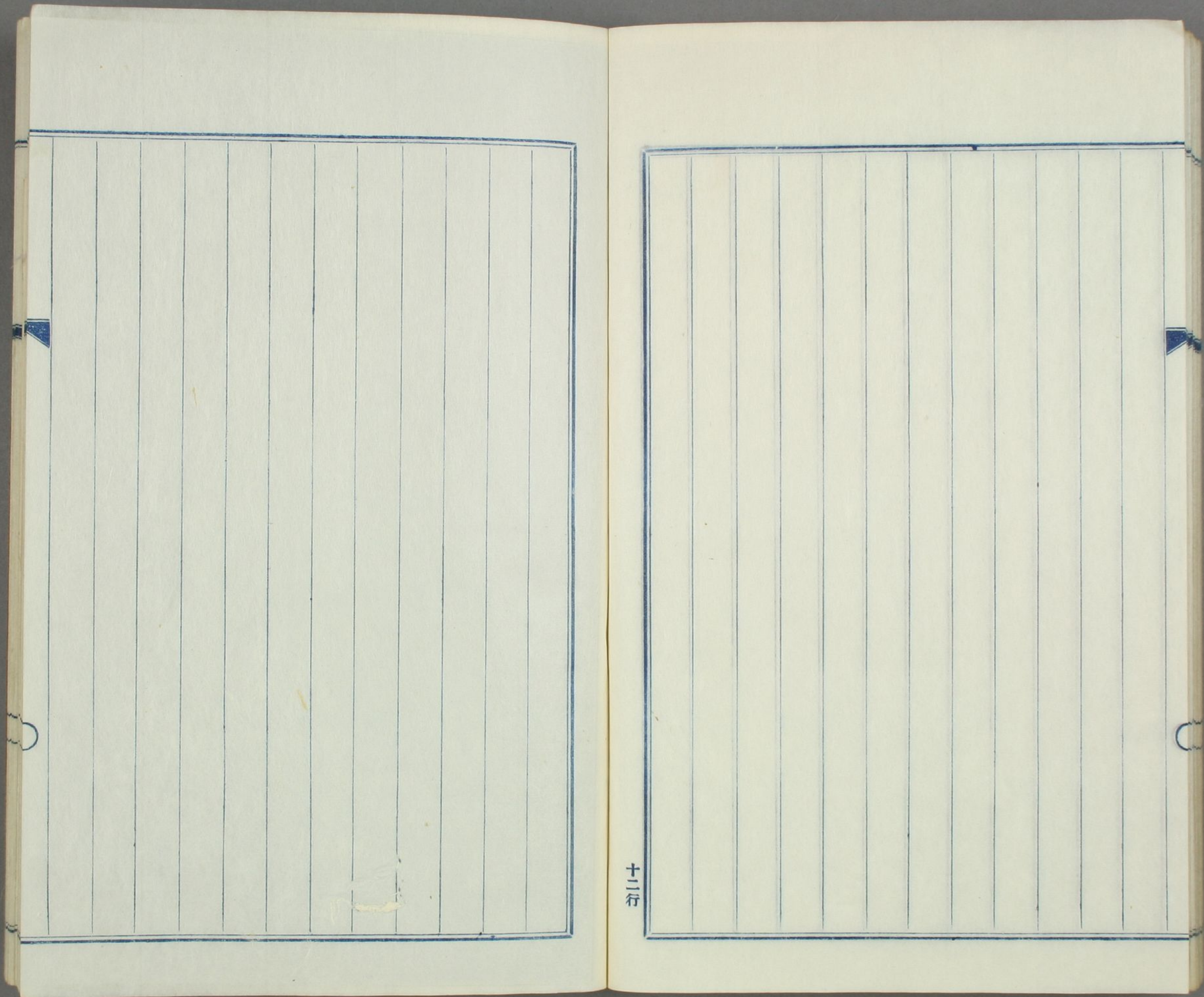
--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

十二行

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

十二行





十二行

○今次の旅行秋田の鏡山をへつて後、招えんが  
御名を受け陳列館を見る中、平福徳屋の字の  
鏡山の細圓二枚あり、又一二の橋と見え  
一橋は<sup>高</sup>橋と見え、紋服をつけし(紋付の羽織  
を<sup>着</sup>けし)一漢人夫と見え、山と見え、<sup>此</sup>の  
也、紋服を着けしことあり、常盤北園、乃ち生保  
長く<sup>渡</sup>海留せしことあり、常盤北園、乃ち生保  
鏡山を見ることあり、同と見え、上頸、三曲の如し、  
佛の形と見え

道途處、陰人多、負、不惟、負物亦、負人  
人、乘人、時人為馬、去云、則去、勝馬、馴、信人、大  
元似、稚子、復、初、廣、晴、如、白、於、銀、偷、様、為、圓

卻不惡、恰似孝子負老親  
生保田山領教也 活佛

三海生

○秋田旅中、山陽并、三村の墨蹟一二を見る、初  
め大館の旅舎市原に宿せし日、坐客に無等乃  
人と寄りたる茶の唇風あり、此迄の如く就て無  
等の何人なるやと問ふて北地淨土寺住勝に  
りし傳ふるを知り得ず、此迄を能くせし  
て持て難す、と後彼の言を寛く於ける一  
般也、此席凡の歎後、兼て其の某年とあ  
り坐客語る、頼三村三郎か北地浄土寺住勝

十二行

大館より来り三十餘の足を留めたる、此の淨土  
寺、三村と見え、お中めの名に北地浄土寺、  
ハ三村と見て知る者生とあり、  
目するを見て、姑めを甘人と知りしとまかり歎  
待りといふ外、別と送るの傳、  
憾らう、三村の大館とあり秋田に來つて、  
を(の徳中)、寄る者し、  
こゝより滞在月餘、  
床坐時の風景を觀一泊を越し、  
な半切の一幅、  
己ざく、  
若山粘糸遠糶物式某漁舟出柳蒲

一碑何妨少時睡、夢魂飛入洞庭湖  
此三倉鼻、鼻、五條田、ある、馳眺、使るる地、三村、秋田を去り、山形の新庄に入り、多え、城後、来り、なが、如し、余、新庄、入り、偶、吉田和男の、訪ひ、来り、會し、該次、三村の、こと、及ぶ、吉田、曰く、三村の、新庄、来り、滞在、し、る、家、の、長、家、ろ、う、と、余、初め、此、る、定、を、知、る、吉田、の、家、の、鑄、物、言葉、を、い、土、屋、と、稱、し、此、地、の、舊、家、ろ、う、余、和男の、父、と、曰、ある、を、以、つ、て、滞、る、中、一、日、往、訪、す、主人、信、吉、といふ、余、と、同、甲、ま、る、新、庄、の、抜、時、代、の、同、定、也、主人、曰、く、三、村、来、泊、の、日、書、し、る、と、の、今、皆、散、り、と、僅、かに

一二と夜、ま、る、と、出、し、示、え、なる、ハ、積、翠、平、の、二、字、類、也、此、家、教、の、新、庄、の、大、字、を、免、え、ん、持、也、若、し、古、く、庭、掛、夫、其、君、也、積、翠、平、の、二、字、を、保、す、偶、れ、あ、る、也、三、村、の、此、家、を、辭、し、京、都、に、向、へ、ま、む、此、家、の、字、を、了、る、書、籍、三、る、家、に、由、着、の、日、字、を、了、る、也、同、一、語、あ、り、皆、親、ら、ん、滞、在、中、の、款、待、と、海、を、或、ハ、鳥、法、(新、庄、の、酒、樓)に、於、ける、狂、醉、と、言、ひ、或、ハ、取、遣、し、る、定、を、及、し、る、ん、ら、る、と、あ、る、ハ、蓋、し、附、後、地、の、他、家、へ、持、有、り、た、際、の、お、状、と、る、ハ、外、に、技、折、一、枚、あ、り、粘、漆、を、何、る、子、の、成、の、ハ、字、を、表、意、と、云、す、他、ハ、皆、散、し、幅、ハ、一、七、あ、る、一、主人、の、後、に、三、村、ハ、京、都、に、由、り

間もろく幕府の捕ふ不とさうさうと、彼らより遠く北  
海道に游び泊路北<sup>①</sup>地に主家の長おびをさうと  
いふ捕獲を廻けし者は、こと疑ある事し、彼ら  
新庄より濱傳く、秋後に入り、村松濱の正室  
といふ富豪家に投し、さうと、此の吉田の家子  
也と親族関係あり、正室のおふらと此家と頼り  
多敷、彼らより海川流を伝へ海路新庄と達し、  
こゝ余の所花するの物の後修之れを証す、<sup>②</sup>  
濁川其時、<sup>③</sup>三村の書し、権者の二宮家な  
とい新庄より北浦の富豪家を訪め、ひ、陸の  
押是らふ一し、曾て吉田の戚家直正の吉田  
善右衛門の家、時産の松崎の泊を見しことあり

松崎を伝へ、やめけし、北松崎の泊、新庄の吉田に  
あり、さうと、その後、直正の吉田に、海し、さうと、信  
吉の流る、依つておのち、張次三村と、就て知り得  
る、<sup>④</sup>右のこゝ、山陽と、就て、秋田に、吉幅と、花さ  
る、校友あり、秋田の大夫、丸川緑を、京河と、ある、山  
陽と、交り、<sup>⑤</sup>寄つて、山陽より、寄る、今、轉て  
援友、所花も、但、北人、秋田市、外、遠隔、地、  
居る、か、お、一、説、する、能、い、さうと、一、説、を、経、る、い  
大、館、に、於、て、館、助、役、の、所、花、に、係、る、研、一、面、の、い  
北、研、蓋、に、天、核、の、二、字、を、判、り、る、海、路、を、判、け、る  
山、陽、の、と、る、こと、お、け、し、<sup>⑥</sup>研、ハ、中、島、と、事、中、島、と、積  
り、大、ろ、く、さうと、館、の、祖、父、山、本、北、山、つ、下、る、と、天、籟、

と云い善唐錦所著と因定関係あり天籟の子  
の国歌を著しし揮園といふ此跡はもと川田重  
江所持のものありて山陽の者ありて其の  
時代彼もいふし其のよきものありて其の  
又率披かりありすと終て一覽を得たりし  
○秋田の今日一日開を得て図書館にあり観る此後七と城  
内ありてその改築を今に城ありて但し城を築し其に  
近し、あるの立派なるを築也、其の古も意ありて余  
先づ平田馬胤作爲位淵の自筆本を見んことを  
い、馬胤本を、神字日文係一冊古史成文一冊神皇  
系圖一卷あり皆多く塗抹を見る所本也、此爲位淵  
の自筆本も、僅に西洋茶材考五冊を収む

又、信淵の各社、海り度く、形め等一端を見るし  
此後、根本通の遺書大部分を収む、經書の内  
に見るべきものあり、其の書りて度く、而して其の在りて  
る朱書、其の自筆のものあり、其の論語の帖も、今に此帖に  
り、此帖も、心紙の房も、あり、其の帖も、今に此帖に  
前田香雪等の書も、あり、其の帖も、今に此帖に  
この書、其の四花中、其の帖も、今に此帖に  
五種、其の帖も、あり、其の帖も、今に此帖に  
とあり、其の本、其の復刻、其の帖も、今に此帖に  
其の帖も、其の本、其の帖も、今に此帖に  
たえ、其の帖も、其の本、其の帖も、今に此帖に  
人時、其の帖も、其の本、其の帖も、今に此帖に  
以上、其の帖も、其の本、其の帖も、今に此帖に

正者と見ふべきハ、麓山前灌園の本名、圓講五十卷  
(このを移すと見るべき)よのよと、麓山の久下をあらわ  
珠を也) 丹野普高者(このも、あるの久巻をあら  
と略々傳へる京都に、同者、飯もこえを傳へる  
比普高者(のうし) 等と見る、倉庫に、今、枝宗  
其古流字を、の伊勢物語、其他古刻を、見る、  
余の注意、に、伝り、神玉部、類く、後、せん、の、教、行  
、及ぶ、飯、中、系、に、飯、負、古、者、に、物、色、の、人、を、さ、す、余  
の、冬、飯、を、扱、と、し、審、定、を、清、ん、と、出、し、る、圓、出  
累、に、堆、を、為、す、但、比、時、不、興、り、し、為、の、廣、ろ、く、海、  
權、する、と、得、さ、し、し、此、飯、に、ま、く、の、名、を、を、お、す、  
故、麻、中、島、を、出、し、る、よ、の、珠、の、の、か、ら、す、珠、を、し、

く、圓、の、の、城、址、を、も、る、マ、リ、ヤ、の、石、像、と、其、阿  
古、の、石、像、を、し、の、石、像、に、し、像、身、に、其、草、を、と、刻、す  
亦、時、ク、リス、ト、友、の、上、流、社、を、行、ん、る、紀、念、物、を、見  
る、へ、一、回、古、跡、を、移、し、四、城、内、の、公、園、を、観、拜、す  
神、社、を、拜、す、平、岡、馬、原、信、濃、を、祀、す、と、  
此、社、ハ、情、書、と、神、体、と、を、し、カ、神、体、と、秋、田、友、と、同、祀  
の、為、め、別、所、に、移、し、や、す、故、に、其、の、古、栗、田、二、儒、を、  
祀、す、所、と、ら、り、し、此、城、址、を、一、説、し、一、特、徴、と、す、こ  
と、を、知、り、得、る、人、を、見、る、栗、城、と、石、壁、を、用、ひ、し、る、こ  
也、或、ハ、思、ふ、関、ヶ、原、に、秋、田、友、家、原、の、想、を、頼、ん、だ、を、也  
地、に、移、さ、ん、異、志、を、さ、す、と、表、す、ま、る、ん、特、に、石、壁、を、見、く  
の、栗、城、と、す、し、め、ま、る、あ、ら、う、や、と、此、城、矢、留、城、と、い、ふ

所以、梁成の際地を相し、矢を放つて其の留まる所を  
城地と定む。此所ある所以といふ。

○此旅行の事、擇毫を初め、日あり酒河原の  
執筆に忙し、余流に應し、語を遂ふ。是等の過  
多、疑致、松雲閣とあるも、房山余が書閣の  
扁額を此り、道不、此等の、凡、日、夜、月、おまを  
位とす。か故也。○又十和田湖畔に宿し、舟中、亭の  
め、中津、河波の語を記す。十和十津、書おしき、の故  
也。大領のち、年、讀者、今、余、等、一行、に、字、も、書、の、扁  
額、も、と、ある、余、讀、千、古、書、交、天、下、士、八、字、を、撰  
ひ、余、先、讀、千、三、字、を、録、一、行、交、二、字、荒、く、一、字、を  
分、考、し、餘、白、く、余、後、語、を、録、す、今、主、表、む、て、如、左、扁、額

と得たりと稱す。大湯驛の旅、彼が、某、と、有、り、此、家  
の、庭、に、大、池、あり、鯉、魚、を、養、ひ、は、舟、に、龍、門、閣  
の、扁、額、を、掲、ぐ、余、其、の、撰、字、を、と、り、出、を、と、り、  
余、龍、門、閣、の、三、字、を、考、し、と、並、ぶ、又、此、庭、に、  
松、樹、梅、樹、多、く、園、の、風、致、を、為、す、余、松、梅、を、  
條、の、扁、額、を、書、す、漸、波、の、齋、の、春、の、社、を、  
し、殊、に、多、く、の、押、毫、を、為、す、余、亭、女、主、の、為、め、  
剪、燈、籠、の、一、額、と、收、の、竹、を、以、懸、縁、深、く、  
殺人、劍、等、の、額、を、就、れ、と、也、又、新、居、に、  
揮、毫、或、ん、と、夜、に、忘、川、橋、二、者、以、數、年、一、書、  
一、行、の、云、を、治、め、余、卷、首、に、一、松、梅、と、題、  
畫、帖、に、署、し、臥、禪、帖、の、標、題、を、心、の、



録一々録すまゝ遺りたる也 七月十日新河史を

ニして

○新河史を讀む後不意に別途の多人の志同を  
檢すや、三里田英雅田之朔郎の志也。里  
田は古河の時にあつた人にして、今もその子の早  
年一、其の里田のお中へあつた右は、取めおと  
お中へ一田を、このことを云ふ事、是れこの志の田を、  
一田におぢを、海へて、定めてあつた、志を、  
山陽口を、外史に、はるる、志を、  
の志を載す、これに、左に、取めおと、此の、  
何か又、載せ、ある、一を、見、一、こと、  
の、拙著、この、者、き、つ、也、  
井内、金、大、一、

書と、家、七、月、の、  
一、こと、あり、と、青、わ、り、  
志、ま、う、と、  
を、  
志、ま、う、と、  
未、知、し、人、  
跡、の、字、を、  
へ、ま、  
新、河、史、後、  
の、若、を、

法を定むるは、この物をもつて、いかに  
 とき、いかに、拙者の反響あるを、  
 文字の縁を結ぶよ、いかに、心  
 のゆくまゝ、持てて、いかに、ぬき、いかに

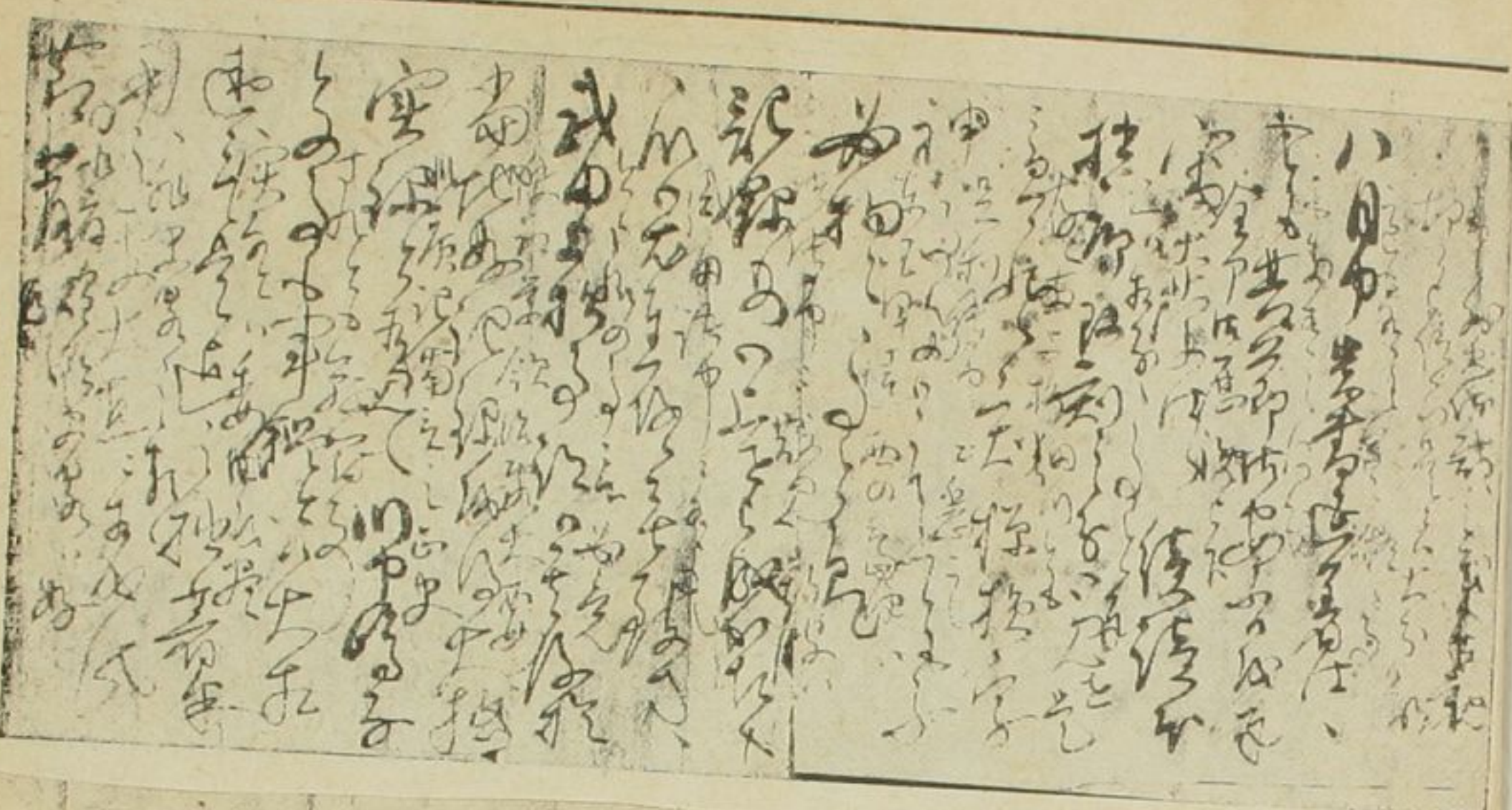
七月十日

附近、不刊の山陽、河内、日本外史、

関する、部、拙著に、漏れ、あつた、他の、補  
 修を、おぼた、いかに

味内、全、巻の、記、り、考、に、あつた、  
 東洋文化に、載、せ、る、後、原、南、亭、の、古、文、  
 日、余、を、難、し、む、る、は、他、山、の、名、と、す、  
 べし

同上進記



村、別、以、乘、四、十、  
 子、子、子、可、可、可、  
 身、一、由、先、心、  
 一、し、ま、い、  
 及、し、有、る、人、  
 者、一、に、は、て、  
 在、一、に、は、て、  
 を、一、に、は、て、  
 新、一、に、は、て、  
 日、一、に、は、て、



小田原の...  
...  
...

おれ...  
...  
...

No. 1  
おれ...  
...  
...

名物...  
...  
七月十九日  
...  
...

同上追記



頼山陽より田邊石庵(田邊朝朗博士の祖父)に  
 贈りたる文  
 新禧申收候  
 吉治より貴書達來、悉御近況、大慶仕候、小學紺  
 珠は大部に可相成候、貴序任、命加鄙意候へど  
 も、御取捨可被成候、何分博洽は措、手候事ども  
 に候、御話申候武田系圖菊池なども皆御寫被下  
 候に及不申候、義光より信滿迄何代、信滿より  
 信虎迄何代との世數承度候、菊池之軍之事、武  
 政と義滿戰に屈而降候事有之、是等はどれが實  
 録と申事御聞可被下候、武政より何代にて亡候  
 歟、是亦世數にてよろしく候  
 外史乞校正候事も考居申候、當世人情因、此自  
 街之媒をいたし候様にとも不知、心者之取沙汰  
 に逢候も口惜候、何卒御取持にて、彼方より取  
 寄見てやらう杯と出候と妙に候、如何々々、足  
 下知、己者僕心事性質も御存なるべし、成、此書  
 不朽候志之外無毫毛所、求、於世は御存の事

名人尺牘(二)

頼山陽より田邊石庵(田邊朝朗博士の祖父)に  
 贈りたる文  
 新禧申收候  
 吉治より貴書達來、悉御近況、大慶仕候、小學紺  
 珠は大部に可相成候、貴序任、命加鄙意候へど  
 も、御取捨可被成候、何分博洽は措、手候事ども  
 に候、御話申候武田系圖菊池なども皆御寫被下  
 候に及不申候、義光より信滿迄何代、信滿より  
 信虎迄何代との世數承度候、菊池之軍之事、武  
 政と義滿戰に屈而降候事有之、是等はどれが實  
 録と申事御聞可被下候、武政より何代にて亡候  
 歟、是亦世數にてよろしく候  
 外史乞校正候事も考居申候、當世人情因、此自  
 街之媒をいたし候様にとも不知、心者之取沙汰  
 に逢候も口惜候、何卒御取持にて、彼方より取  
 寄見てやらう杯と出候と妙に候、如何々々、足  
 下知、己者僕心事性質も御存なるべし、成、此書  
 不朽候志之外無毫毛所、求、於世は御存の事

頼山陽より田邊石庵(田邊朝朗博士の祖父)に  
 贈りたる文  
 新禧申收候  
 吉治より貴書達來、悉御近況、大慶仕候、小學紺  
 珠は大部に可相成候、貴序任、命加鄙意候へど  
 も、御取捨可被成候、何分博洽は措、手候事ども  
 に候、御話申候武田系圖菊池なども皆御寫被下  
 候に及不申候、義光より信滿迄何代、信滿より  
 信虎迄何代との世數承度候、菊池之軍之事、武  
 政と義滿戰に屈而降候事有之、是等はどれが實  
 録と申事御聞可被下候、武政より何代にて亡候  
 歟、是亦世數にてよろしく候  
 外史乞校正候事も考居申候、當世人情因、此自  
 街之媒をいたし候様にとも不知、心者之取沙汰  
 に逢候も口惜候、何卒御取持にて、彼方より取  
 寄見てやらう杯と出候と妙に候、如何々々、足  
 下知、己者僕心事性質も御存なるべし、成、此書  
 不朽候志之外無毫毛所、求、於世は御存の事

に候、群兒ノ毀譽もカマワヌ事なれ共、士之所  
 爲不可不慎候  
 祭酒先生の噂内々被仰下是亦得、大知己候と奉  
 存候、併不悉、僕著如何、苟悉如何、則其相知不  
 止、於此、奉、存候、そして序文にても辱、賜候  
 はば此書キツト不朽に可相成候へども、自、僕  
 于、求之はいや也、困たるものに候呵々  
 仲春十六日  
 御狀着候より十日不立候  
 非、懶  
 襄  
 季德雅契  
 凡右  
 山陽より篠崎小竹に贈れる文  
 通議日々御覽被下候哉、未御掛なき歟、梅は一向  
 と奉存候、江南亦然歟、僕齋居不、知、外事、  
 梅をもらひ候へども皆蓓蕾而已、雖、然今日得、  
 一大枝槎牙絶妙姿態者、對、此掛物と存候て、

出秘藏之倪幅、只今披對いたし居候、此間は虎  
 屋饅頭澤山に被下日々相樂忝奉存候、何以報  
 之、役島海鼠腸大割愛奉獻候、時節少し後れ候  
 へども是亦何減北越雪魚哉、世張梯子飲とい  
 へども一啜可被仰付候、未必不辨溜瀧候、  
 草々頓首  
 正月十八日  
 小竹盟臺  
 山陽より雲華上人に贈りたる文  
 御細書如面相樂申候、漱金紙承知仕候、春琴畫  
 先づ留置候、廿八日はつかへ候、其後御待申候、  
 其他它可言事多如山如阜、期面盡候、  
 十一月廿六日  
 雪華師 襄復  
 今日之雪には必御出と存居候、明朝が大分好下  
 物も有之候、裕齋子より一小陶の古酒もらひ是  
 にて一酌と存候也、其便に走筆如此、  
 臚望  
 枝上之雪既消て山々始露矣  
 襄 和南  
 雲華師 侍者

出秘藏之倪幅、只今披對いたし居候、此間は虎  
 屋饅頭澤山に被下日々相樂忝奉存候、何以報  
 之、役島海鼠腸大割愛奉獻候、時節少し後れ候  
 へども是亦何減北越雪魚哉、世張梯子飲とい  
 へども一啜可被仰付候、未必不辨溜瀧候、  
 草々頓首  
 正月十八日  
 小竹盟臺  
 山陽より雲華上人に贈りたる文  
 御細書如面相樂申候、漱金紙承知仕候、春琴畫  
 先づ留置候、廿八日はつかへ候、其後御待申候、  
 其他它可言事多如山如阜、期面盡候、  
 十一月廿六日  
 雪華師 襄復  
 今日之雪には必御出と存居候、明朝が大分好下  
 物も有之候、裕齋子より一小陶の古酒もらひ是  
 にて一酌と存候也、其便に走筆如此、  
 臚望  
 枝上之雪既消て山々始露矣  
 襄 和南  
 雲華師 侍者

名人尺牘(三)

頼山陽より田邊石庵に贈りたる文  
 と仕候、昨日出来かゝりを成就候也。  
 御家内様に山々よろしく被仰下度、カ、大喜仕居候不  
 一。  
 四月廿二日 襄 頓首  
 春 琴 長 兄  
 頼山陽より雪堂老人に贈りたる手簡  
 先刻は梅ありがたく奉存候、御歌御こし被下、感吟心に  
 こたへ候て催春涙候事に御座候。  
 園の梅またきながらに手折來し  
 君が心の香ぞ匂ひける  
 として歌になり可申候哉、御直し可被下候、又御歌の  
 詞につきて感觸候所有之、かく  
 あふぎみし日は入り果つ春の夜の  
 あやなきうめはさく甲斐もなし  
 是も心ほどはきこへ申まじくと奉存候、盲不畏蛇、御  
 憫察可被下候かしく。

頼山陽より田邊石庵に贈りたる文  
 と仕候、昨日出来かゝりを成就候也。  
 御家内様に山々よろしく被仰下度、カ、大喜仕居候不  
 一。  
 四月廿二日 襄 頓首  
 春 琴 長 兄  
 頼山陽より雪堂老人に贈りたる手簡  
 先刻は梅ありがたく奉存候、御歌御こし被下、感吟心に  
 こたへ候て催春涙候事に御座候。  
 園の梅またきながらに手折來し  
 君が心の香ぞ匂ひける  
 として歌になり可申候哉、御直し可被下候、又御歌の  
 詞につきて感觸候所有之、かく  
 あふぎみし日は入り果つ春の夜の  
 あやなきうめはさく甲斐もなし  
 是も心ほどはきこへ申まじくと奉存候、盲不畏蛇、御  
 憫察可被下候かしく。

出秘藏之倪幅、只今披對いたし居候、此間は虎  
 屋饅頭澤山に被下日々相樂泰奉存候、何以報  
 之、役島海鼠腸大割愛奉、獻候、時節少し後れ候  
 へども是亦何減、北越雪魚、哉、世張梯子飲とい  
 へども一啜可被、仰付候、未必不辨、溜瀝候、  
 草々頓首  
 正月十八日  
 小竹盟臺  
 山陽より雲華上人に贈りたる文  
 御細書如、面相樂申候、漱金紙承知仕候、春琴畫  
 先づ留置候、廿八日はつかへ候、其後御待申候、  
 其他它可、言事多如山如、阜、期、面盡候、  
 十一月廿六日  
 雪華師  
 今日之雪には必御出と存居候、明朝が大分好下  
 物も有之候、裕齋子より一小陶の古酒もらひ是  
 にて一酌と存候也、其便に走筆如此、  
 臘望  
 枝上之雪既消て山々始露矣  
 襄 和南  
 雲華師

と、右は私の詩の様なれども、是は洗花親父の作也、そ  
 れを本歌取にして、

頼山陽より雪堂老人に贈りたる手簡  
 先刻は梅ありがたく奉、存候、御歌御こし被下、感吟心に  
 こたへ候て催、春涙候事に御座候。  
 園の梅またきながらに手折來し  
 君が心の香ぞ匂ひける  
 として歌になり可、申候哉、御直し可被下候、又御歌の  
 詞につきて感觸候所有、之、かく  
 あふぎみし日は入り果つ春の夜の  
 あやなきうめはさく甲斐もなし  
 是も心ほどはきこへ申まじくと奉、存候、盲不、畏、蛇、御  
 憫察可被下候かしく。

食、晤忘、歸村路斜。殘尊移、席燭、幽花。恨無、相追參差  
 竹。經、涉紅塵、到、汝家。  
 と仕候、昨日出來かゝりを成就候也。  
 御家内様に山々よろしく被、仰下、度、カ、大喜仕居候不  
 一。

四月廿二日  
 春 琴 長 兄  
 襄 頓 首



出秘藏之倪幅 只今披對いたし居候、此間は虎

雪堂 老人

襄

頼山陽より小石樗園に贈りたる手簡

机附貴价候、よく見ればヤハリ粗末に候へども、高きものなきよりましなるべし、此机に付候硯匣卷紙小蠟燭立の類御定置度々取寄ぬ様に被成、或は此机にさらさ大風呂しきなどをかけて、其下に脚爐なりと何なりと自由出来可申候、安神降氣以遇門弟子、是亦自愛計壽之一端也、故人囑意御深領可被下候。九月望

關原井伊退き福島進むの刻

小石 様

頼

古今人の手簡の面白きもの御所持の御方より其寫眞御送り被下候は仕合に存じ候若し寫眞むつかしく候はゞ其文を寫し取りて御送り被下度願上候

名家尺牘編者

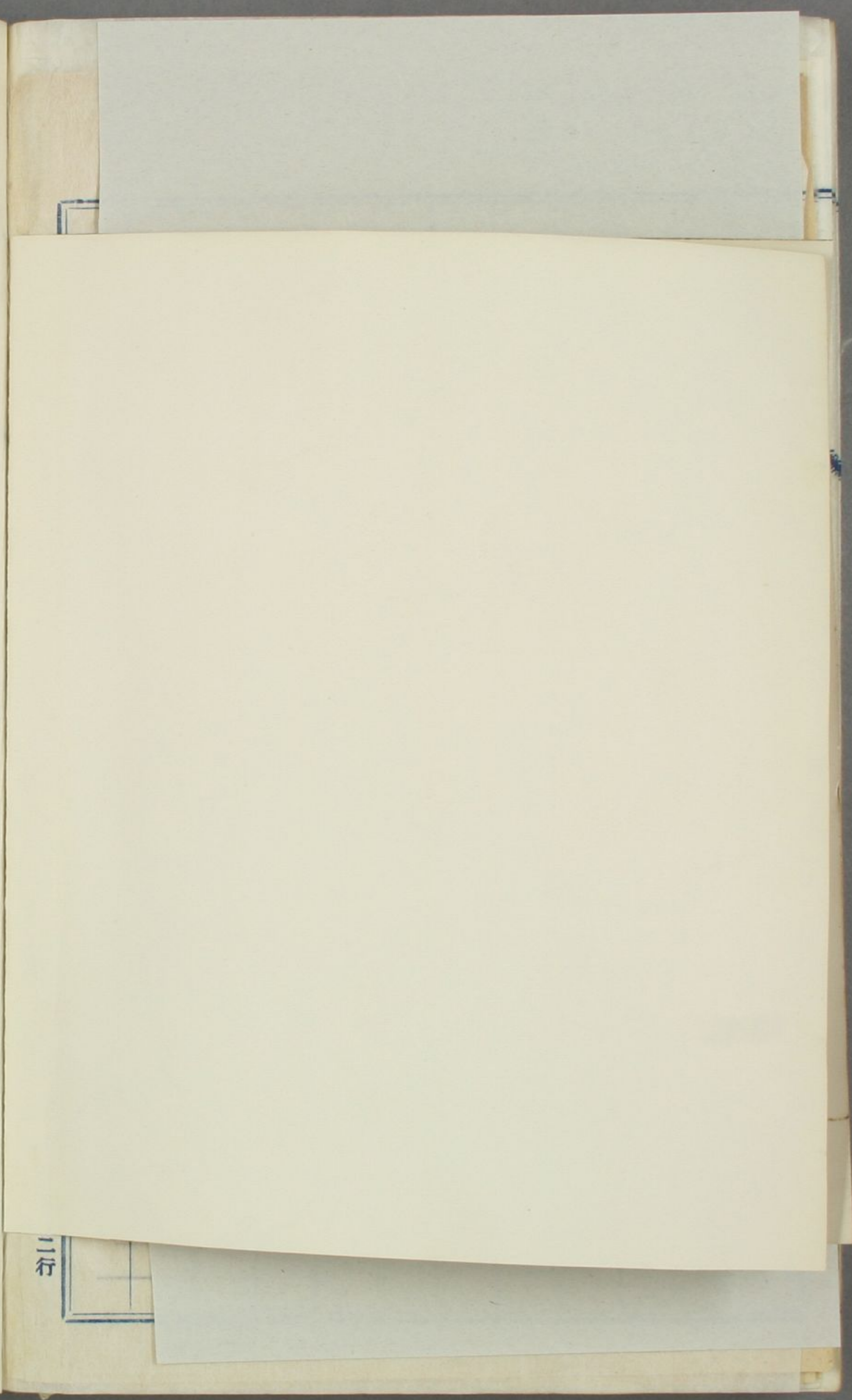
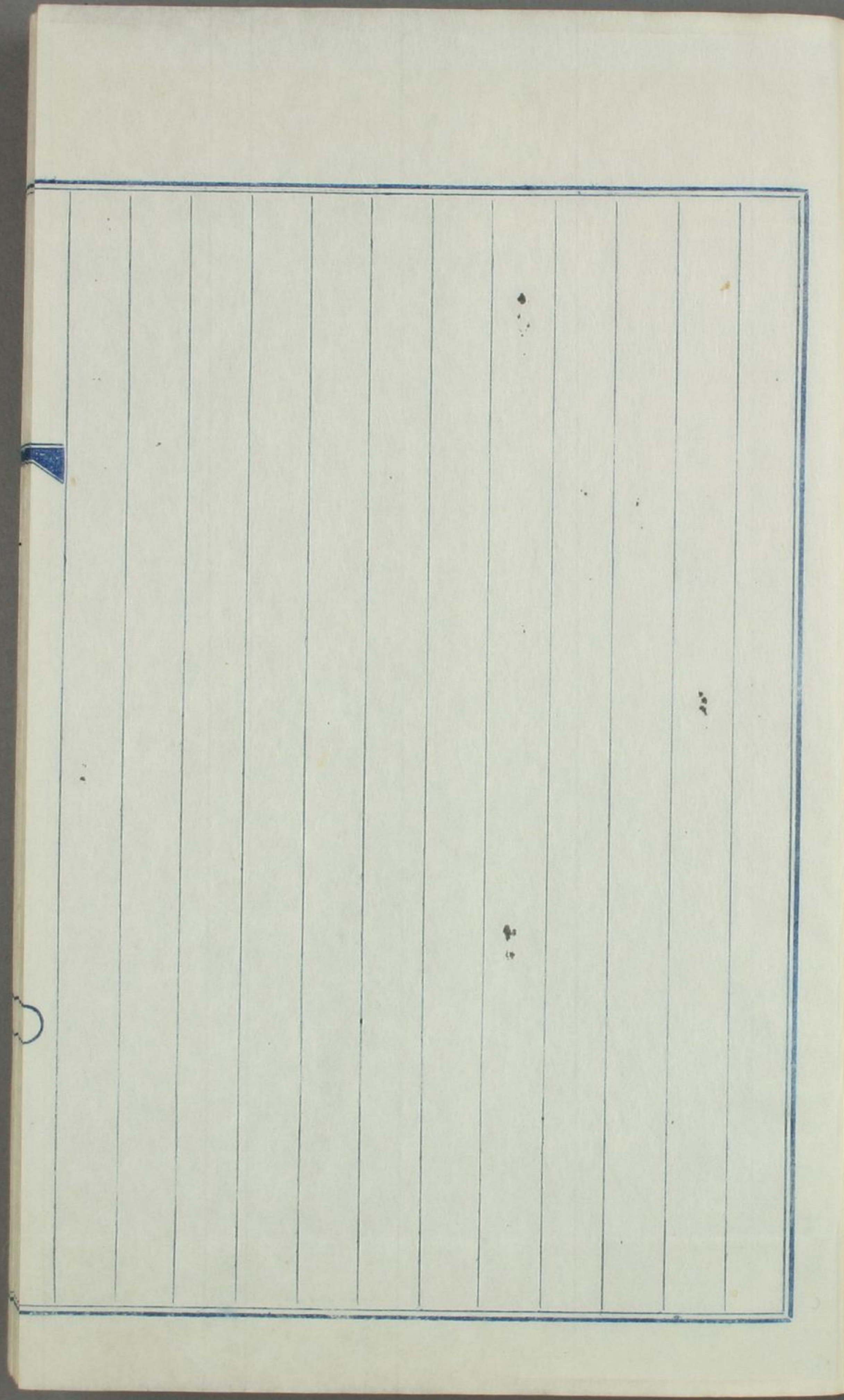
手簡  
雪堂老人  
二八日  
頼山陽  
小石様  
貴价候、よく見ればヤハリ粗末に候へども、高きものなきよりましなるべし、此机に付候硯匣卷紙小蠟燭立の類御定置度々取寄ぬ様に被成、或は此机にさらさ大風呂しきなどをかけて、其下に脚爐なりと何なりと自由出来可申候、安神降氣以遇門弟子、是亦自愛計壽之一端也、故人囑意御深領可被下候。九月望

一  
二  
三  
四  
五  
六  
七  
八  
九  
十  
十一  
十二  
十三  
十四  
十五  
十六  
十七  
十八  
十九  
二十

出秘藏之倪幅、只今披對いたし居候、此間は虎

今自... 亦... 友  
... 往... 自...  
... 其... 氏  
... 方...  
... 者...  
... 女

... 智...  
... 氏...  
... 氏...  
... 氏...  
... 氏...  
... 氏...  
... 氏...



二行

○今次もあま林を經て秋田へ今羽城傳を以て秋田へ入  
るの旅程の如くを記述するもあまそ記述なきこと多し一  
行五六人利するも校友と申くせんあま多し申するも  
余温酒を辭しぬ故を以て酒を得、又此中比  
格初日誌を細録するを得たり、故に再々此  
を考ふるに及ばず、但比こゝろを考ふるを記す

一羽城傳と大山と稱する酒は、名ある地あり、余が  
幼少の頃此の地の酒を飲御田：常人七くらん、之を  
と飲ぶを好むゆへ、定之を之を樂するを記す  
とす、其味濃厚も七くらん淡るゝが、余少年  
の時嘗ても御田其の味を記す、此の旅次傳に

大山を過く、余五十年振るゝ一酒杯を味んると  
此一人の國ふ其の味轉旋して二瓶の各  
一杯を盛るゝもを輪して曰く大山の酒を  
此年此酒に及ばず故に彼人を亦めず此れを  
贈ふと其銀、奥羽自慢と云ふ産地ハ山形好  
田川郡山添村佐藤仁左門製する所といふ  
余其味を思へば、余が大山酒を求むるの  
美酒を得んことをあまそ、産地酒の酒を得  
て懐心の情を自切らるゝのんとす、のふ、幸  
大山野を校反加藤、代持車中より、奉り  
二瓶の酒を贈ふ、これ則ち大山酒をか好む此  
地醸家の雄といふ、銀、大山の醸家、家七此

人の縁故をうらみ、余も長人が推く秋後路に入り頼  
波に柱れ一行をせし先づの奥羽自慢を傾けし  
新島のあなご柱れかお無きふり酒を試み  
而して後者の前者に比すんば否の品下りの瓶  
を傾けおす能くおしと已む、後者の酒銘か  
花川といふあまするも往時大山酒多く北海  
道に頼めし一醸家五ヶ戸の多きをよみあり  
惟新後交るる関係変せん北海道の願ひを  
提物本醸家、奪え、酒戸逐々減し品  
質も昔の如くふる能はずと  
一 余秋田に入り富源の大なる感し校友會席上余  
の所感懐を述べ

余は秋田に於り是からざる秋後路生れ北の免境  
に入らまむ此地に思をふる入んたるを寧ろ不慮儀  
と思ふと、わのまの縁因関係を陳べ、此地の三浦  
平田馬風林若尾行淵の著述、見るふ下の海か  
らざるを云ひ、近時の儒者根本を述ぶるか早大に  
関係ありし時のことな及ひ、友人多くの秋田生  
身者あることを云ふと、寺崎彦彦内務湖  
南上遠望亭の村田忠流田中隆三等を  
類し、十年前のこころ切りし坂本三郎が  
おのの心得を研究の爲に余を訪ふて深更  
に及び、十一時を過ぎし頃余の家へ坂本ある  
と知ら、大隈伯も秋田におりたりとある矣

室の内命ありしことをいふも附言し、坂本在任  
時代は是れ非末ねを勤めしむるの技合はうら  
いゆと修り

秋田の富原の大多ること、就ては森林の全好の  
八割を占め、現に八十八萬町歩の廣き、修り  
路に良材に富むること、實地と就ては、人の忠信を  
しるも、大なりと説き、鏡山に列る高き、あり、旅次

五の、大鏡山を目撃し、日石、其  
敷、井櫓の、林主も、盛況を現  
と、結文、入りて、先づ、鏡山、あり、の、こ、を、振  
り、大、眼、も、も、し、は、る、こ、と、を、言、ひ、野、に  
ん、る、南、部、名、馬、の、養、の、今、か、者

秋田音頭

山に、見、お、せ、や、金、に、杉、の、湯、を、お、す、油、を、  
里、の、神、は、崎、麓、を、お、て、炭、を、賣、り、お、す、  
秋、田、の、名、物、は、山、東、北、一、番、だ、金、山、本、山、に、  
花、咲、く、園、人、は、お、お、お、お、  
秋、田、の、酒、の、味、は、お、お、お、お、  
金、に、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、  
秋、田、の、名、物、は、山、東、北、一、番、だ、金、山、本、山、に、  
梅、山、地、豆、に、大、箱、曲、り、は、  
や、あ、い、と、せ、よ、い、や、な、  
き、た、り、と、ん、ど、つ、こ、い、な、  
よ、い、と、ん、ど、つ、こ、い、な、

情のこころ、きを説き、斯の如き、富原の大多  
を、見、し、誰、ん、に、地、の、天、夏、の、大、多、る、を、説、く、か、こ  
る、も、得、ん、や、然、ん、も、地、の、富、原、を、説、く、か、こ  
る、一、鏡、山、と、云、く、牧、畜、と、云、く、皆、み、免、れ、ま、ん、に、放  
捨、ん、林、の、ま、の、ま、ん、也、と、い、は、る、後、漸、に、お、の  
啓、き、を、據、り、し、よ、る、ま、ん、也、と、い、は、る、前、後、放、捨  
ま、ん、し、時、代、也、ま、ん、の、ま、ん、今、漸、に、化、育、質  
成、天、工、開、物、を、つ、と、お、お、お、お、お、お、お、お、  
多、の、開、物、を、ま、ん、の、ま、ん、の、い、皆、他、邦、の、人、を、地、天  
の、人、の、切、り、を、お、お、お、お、お、お、お、お、  
を、説、き、ま、ん、を、得、ず、と、校、友、に、説、き、先、す、る、不、あ  
り、なり

室の内命ありしことをいふも附言し、坂本在任  
時代と是非をねを動かし、その校舎をいふは  
一、つとけり

秋田縣の富原の大字、ことゝ就ては森林の全野の  
八割を占め、現に八十八萬町歩の廣き、深い  
路、良林、富原、ことゝ實地、就ては、この  
し、も、大、と、説き、鏡山、の、別、る、高、く、あ、り、旅、次、  
指、點、の、方、に、四、五、の、大、鏡、山、を、目、擊、し、日、石、其、居、  
の、任、言、に、傳、る、數、登、井、橋、の、林、主、せ、る、盛、況、を、現、  
秋、田、市、に、送、を、踏、文、入、り、て、先、の、鏡、山、あ、り、の、こ、を、振、  
こ、へ、り、鏡、堂、の、古、跡、を、見、し、ぬ、る、こ、と、を、言、ひ、野、に、  
牧、畜、業、の、盛、ん、を、南、部、名、馬、の、養、の、今、か、者、

舊のこゝ、きを説き、斯の如き、富原の大字  
を、見、し、誰、ん、に、此、地、の、天、皇、の、大、き、を、敬、ぶ、か、こ、  
る、を、得、ん、や、然、ん、も、此、地、の、富、原、を、い、ふ、に、森林、と、  
あ、い、鏡、山、と、い、く、牧、畜、と、い、く、皆、み、免、れ、ず、ん、に、放、  
擲、ん、鏡、山、の、こ、の、い、ん、也、と、い、ふ、は、後、淵、を、い、の、  
際、を、い、ふ、據、り、し、よ、の、い、ん、也、と、い、ふ、は、前後、放、擲、  
と、い、ふ、時、代、也、あ、り、の、い、ん、今、漸、か、く、化、育、賢、  
成、天、工、開、物、を、い、ふ、と、い、ふ、は、訓、り、は、い、か、又、す、い、き、也、  
と、い、ふ、開、物、を、い、ふ、と、い、ふ、は、皆、他、邦、の、人、を、い、ふ、也、天、  
皇、の、人、の、い、ふ、こ、の、い、ん、も、熱、心、を、盡、す、と、い、ふ、こ、の、い、ん、  
を、い、ふ、と、い、ふ、を、得、ず、と、い、ふ、校、友、に、敬、意、を、示、す、と、い、ふ、不、  
あ、り、なり



此の勢を先漢院の室に余が秋田に入りて直感  
一以て赤保の告白をうし

余は旅行酒腸大いに揮ふの壯者を睦若びらしむ  
而も其の勢のつとを養殿やん人先を歎  
せざる能はず秋田の大館校友會に臨  
み先交つて生きたるを先づる金買賤  
馬千金買美人萬金買富貴何事買青春  
春と吟じて古春の人を羨み古春時代の  
映へる春の時切つて感をも先づるを  
痛感すること説き更なる古語を挙げ  
荒木の下に三をあげとあるハち年悔り可  
き真に後世畏れし先づる年を敬せ

さる可なり其の樹弱るる若樹の枝葉やえ  
そよ雲を凌ぎ枝葉天を蔽ふの大樹と  
ることを思ひあはれし悔ふことを得人  
んも壯者も亦先づるを重んじたる可なり先づ  
の貴き年と積むとあるは有る得る  
若を有る若者の及ぶ能はざるハ是らう、勿  
論先づるに取捨けせぬと多くは備え智能の  
堆積ハ先づるあり道徳もよ経験もよ  
術もよ其の尤も熟するよの先づる者  
リ、唯その向え、若先づるの能力集成の日ハ其  
の終焉とけつこの時也吾んこしを古歌  
を誦せざる能はず、曰く若くハ先づる今の心

講話 理學博士 脇水鏡五郎氏談

富土山に曲線美の綺麗に遊進してゐるのは、歴々述べた通り、火山口を構成する岩層熔岩が中央の大火口から噴出して四方に散布する。この種のやうな小山を寄生火山といひ、大室山で、高さ一千二百廿八尺に及び、親に寄生火山の形をなす。この山は、元來母火山の活動の際に、母體に大小の「ひび」が入り、その「ひび」から熔岩やガスが噴出して生れ出たものである。

全身の彫刻史においてあらゆる時代の彫刻史に絶無といつてよい位で、鎌倉時代には既に全身の彫刻が彫刻されたとはわが彫刻史の上にエボク・メーキングの事實であるといはれてゐる。

### 意義ある發見

無理解な數回の修理に埋れた名工の鑿の跡

右について明鏡氏は語る「全くめづらしい鑿で彫刻史の上においても貴重なるものである。鑿の舟狀天はしかもモデルを使つて作られたの少い作品である。同標像は鎌倉時代から明治十六年長谷の彫刻師村田某に至るまで數回手入れされた埋もれた。これを見ても、鎌倉時代に既に全身の標像作者があつたとは彫刻史の上に意義ある發見と思はれる。修理は冠型を尊重して鑿をいだけせ、鑿により肉白色で塗るつもりである。」

### 適當の方法で保存したい

元寇役の頃の作らしい

下村宗教局長談「この彫刻の下村宗教局長は語る「これまでその舟狀天の像は鑿倉八幡の廻廊に陳列して置いたのですが、今日まで一向そんな名作だとは思



### 辨天様の裸像

戦後明鏡氏が撮影したもので、鑿は破損したなほ腰のまはりには後世まとはしめたものである。

### 緑蔭樂話

小松耕輔

大學教育と音楽 大學は日本の最も貴府だといふ。無論これには異存がない。し

### 一日一人

### 新しい怪

私は近ごろ新しく怪談の芝居を在來の怪談とちがった様なものから先の人まさらうこまがりはし

けはらむらうの身を  
を得てしうま  
若し志者の有る  
何らあもる日所を  
ちあもる女も春  
るふ所謂の鬼に  
金棒天下の快何  
おら之ん色きん  
然んも天公之んと  
許さしをたあ  
兄、志者あもる  
人の此歌のとき感

あるも、諸君も春  
の作又、志者あもる  
此感あもる志者自ら  
あもるも、今も  
他のの感も追憶ん  
志者の身長をま  
あもるも、あもる  
あもるも、あもる  
長も、あもる、あもる  
畏敬せよ、年の故も  
次つて亦離を生す可

# 鎌倉で発見された 珍しい辨財天の裸像

モデルを使った鎌倉時代の作  
技巧、構圖共に得がたい藝術品

## 近く國寶に編入か

「鎌倉發見」文部省では、今般般に、美術院の明珍氏を鎌倉に派し、彫刻で發見した國寶その他貴重な古美術品について修理を加へてゐるが、明珍氏はその中からまた國寶に編入されてゐない鎌倉時代の彫像を抱き、辨財天の裸像を發見した。辨財天は、六巧といひ、一メといひ、既に完全した稀有の藝術品である所から發見者の明珍氏初め、澤野幸三、川崎知事も大いに驚かされて國寶編入運動を起し、宗廟局でも國寶保存會の審議に俟つてゐる。

## 意義ある發見

無理解な數回の修理に  
埋れた名工の鑿の跡

右について明珍氏は、鑿の「全くめづらしい發見で彫刻史の上において、重要なものである。鑿の弁財天は、しかもモデルを使つてゐる。これは、少い作品である。彫像は鎌倉時代から明治十六年長谷の彫刻師村田某に至るまで、數回手入れされた。これを修理した。

## 保存したい

元寇役の頃の作らしい  
下村宗教局長談



## 化粧品の不都合

政府は今般般の整理を行ふに當り、化粧品税を新設せんとするが、これを聞いた消費者は、(一)化粧品に對し消費税を課するは下層階級の負擔を重からしむるもので社會政策的見地から見て不合理である。(二)化粧品課税は事實上徵稅困難である。(三)化粧品課税の結果は全國幾萬の製造販賣業者を倒産せしむるに至るべく、由々社會問題である。(四)化粧品課税は當業の發達を阻害し國家産業政策上頗る不利である。

けりらびらうの身  
を得ししうま  
表し志者の有る  
何れも其目所を  
うろく其人志者  
るん所謂る鬼に  
金棒天下の快何  
あつ之んいさきん  
然んも天公之んと  
許さのるをたあ何  
兄、志者ああさ  
人の此歌のことき感

十二行

あるも、諸君も春  
の佳又、志者も  
此感ある志者自  
心、志者も、今も  
他日の感も追憶ん  
志者の志長を志者  
あつ、志者も、あり  
志者も、志者も、日  
志者も、志者も、ひ  
長、志者も、年、故、を  
次、志者も、生、可

司なる人形師が彫刻してゐるがその本體をそのまゝ、極はめ、俗文化してしまつたのだ。彫刻と彫と、ふんとでかためて置いたものだつた。作は文政三年の作といふ。彫刻が彫られてゐるから元寇の役のころのものらしい。九月廿九日初めて造立し舞臺に安置し舞るとある。開催：されるからそれによつて決定します。今般般の整理を行ふに當り、これを修理する等、これぞ彫刻の修理である。これを修理するに當り、そのまゝ、彫刻に置かれぬから、その方法を講じた。

予別て校友の心ありて親愛の心ありて  
余の諸君に 客心を捧ぐる所以なりと

●一此旅次山水秀麗の地を探るに當り美人園を  
踏破す山水之佳を十和田湖を流り、雄摩  
半島を仰み、釜川流を又、陸守に於てハ  
花巻の新勝地を目訪り、而して秋田酒田  
ハ美人郷を以て名あり所と、新勝最也若  
し、余新勝校友會席上所懐の一端を言ふ故  
に郷土に偏して言ふ事ありて中々  
今次の旅ハ皆一久しく耳に熟し初め其  
地を踏破の旅行を以て故に殊に興味を云  
ふ、俾れども知らんが山水秀麗區と美人

東とを特選人の跋瀟しむるが如き趣あり  
陸中の平泉、乾山、秋田の十和田、雄摩、花巻  
吾輩の釜川流皆稀有の勝地と云ふを而し  
て此等勝地のある所に、我美人系母國として秋田  
酒田新勝地、殊に野の、懐ある山水秀麗の  
所、美人の生るゝ、俾れり似て偶然にあらず  
ず、天工巧を弄する所、敢て一方に偏せず  
山水の秀麗の氣、いやに秀麗の人を産む  
不以てある下しんや、すともせんや、哲人の言に云く  
美あるは心美なりと、美人の生むる子ハ其  
母相也、●美ありて其の心亦美なりと云ふを  
得ず、史の云ふ者、曰く北奥ハ蝦夷の種族也

色白くして武勇に富み心術も戸く天孫種族  
のこころ詐謀を用くおとこん此の美人系  
の民族を平らよのさうをなす幸に此の種族に  
属すれんをばに林を奉太白を治むを祝せし  
るを得ざるや

徑来す所の凡日景美さるるありす見  
の美人種さるるを<sup>録</sup>あふが而して之れを  
に比すんか其に極むるものあり、吾輩に十  
和國に比すんきまのありと云ふも海なるべき山  
夷十の多きあり、美人の集ふに新河なる  
上ありて其數亦同の淡みあふが、吾輩に  
此を奉るに天惠尤大なる所天工物

度の巧を極めはるそと云ひて証言あり、支  
那人の俗に哲人長家山は四亦曰く誠如一矣  
三年留、此等の俗皆吾輩後の山はと美人  
を欲するも似たり、女の國名を同するも山は  
の範と婦人の美あるも一奇ありあはすや  
まのくは皆山は四三位一美人を母として産  
すも、戦後校友の相和りする兄弟の如く、母校  
人未つて他の校友を懐かむる覚なきの快  
に打つといふよの美年海國あり也、新河校  
友を以て全四校友を以て吾輩の範とする所  
以て未だ清くも保れりあはす、吾輩の往來を  
戦後に生んたるを祝福せざるを得ざる也

族譜に似たり此の告白も各所を經來りての所  
懐を赤保にあたりたりと敢て心に信する  
あり

一 四代後：海中此主の若多し、「好や」といふや、  
不こ三皇廟あり事家の家名も久澄の和歌  
あり

孫屋の渡破の山名はの鋒三は

海の伝守の鎮あり

此歌羽歌は後述ある内に記しぬあり

一新編滞在の日一又高橋慶彦が此の才一巻  
を刊し、「越後史料」を宣傳する目的を  
以て十数の人をイメリヤ軒に招き、余七亦其不

り更を助け一場の後説を試み此種の編纂  
に人知れず苦辛多きことを細説す才一上代を  
材料の乏しが例する之れを相成に輯するの困難なる  
こと、才二材料の真偽を判するも其の史眼を  
養ふる事、歴史上の病疑問を判定するの必  
要を生じ大なる難題と云ふ事、例へば越州  
といふ古来その若説あり、「越後史料」紙抄を  
以て北海名とするの類也、才三材料の誤り、「皇  
帝の部令を約するも、面倒あり其の簡明を得  
る凡庸史家のうし得ざる事、才四偏見を以  
つて歴史を書く人を誤ること多し、「空手」材料  
を集めたる南の史家の起るを待つを可とあり

史料の蒐集或る意味に於て史を化つるに難  
きこと才力考証とるべきに固く此の文書の影  
字の向外者の想到し得ざる面倒ある事等考を  
陳ぶ、蓋し編纂者あるに平なり、決り材料  
を年次順に排列せんが、是に敢て考を要せ  
ざるに思ふ、向外者の通観するに故に余  
の此説めを考へし所以とす

一言橋義彦と新治の各舎に、子の史談を謝つる  
義彦云く近世の史蹟として保護を要するもの  
長岡城とあり、多くの石城あるも、其を  
以てこの刻念にあり、長岡城は千古に絶  
つる維新革命の一戦し砲火を交へたる不

史蹟としてとるに價値あり、但し長岡城を以て早  
く其の形を没し、幸田と毒しあり、其の  
今ハ石室の一石を得るに能はざるに、其  
化し多幸に僅に一所城蹟として、尙の  
思ひ得るを存す、早し、この碑を建て、  
史蹟を永久に保存すべしと余の感を表  
す、余義彦に越後史料完成迄三年乃至  
四年を要し、此間購讀者を繋ぐの一書と  
越後史談会をひらき、其を説く、時と東京  
史家と招く、可也、越後史料中持に  
興味あることを談し、其も可い、ひ  
史料宣佈の爲り、又々も也

一 伊太利軒ハ余が新居に在りし頃伊太利人ニ言ハレ  
 たり割直ス店とし今改築を經テ宏壯頗る態  
 觀を改む一又富をこゝに張リ諸室を冬觀  
 し、三階を經り屋上ヨリベランダに登リ、新居の  
 夜景を見、高麗と夜中、新居を俯瞰す  
 始也。余新居の好友を厭み、新居の月  
 未だ満里時、帷と花を居其他と多し、能  
 ハズと、蓋し屋上ヨリミ子レヨシの聲、  
 三々り又、市街の電燈、甚だ稀  
 疎として、米也、市街也、吾橋義彦例  
 にもあつて、自分ハ村居、夜中折居、未だ  
 ハ目ふし、故に思ふに、少くも高麗、  
 十二行

敵ハハ、故に暗く、相槌を打つて余に都り  
 援を賜ふ、望期祝儀の電氣會社、重後  
 等との余を訪ひ来る、余前夜目覺せし  
 不を叙し、電氣會社の為すべき事、眼前が  
 甚だ多し、前途、飯地あることを云ふ、同社  
 の為め、祝す

一 名の訪ひ、其の報復の石油地、  
 淡す、其のあり、余、石油を知り、  
 ハ都令入、先聲也、石油地、  
 思ふに、新居、石油の臭氣  
 を以て、掩ひ、余、其の臭氣を、  
 鼻を閉じ、而も、花柳界、此の臭氣を



帯あつた人を被せし、着し石油の氣あるこの金  
 後あつたかた也、余りり東京に於て漸やく同  
 一のことあるを感ず、今ハ銀を口を橋を造が  
 リリンの氣を以て充つ、而して此奥氣を帯  
 めるよ大掛也、乃自動車に乗る人のガソリン  
 と放つの人、（人）此人富貴なるあらざるハ  
 紳士也と説き、うつて一場をみるす  
 一今次新酒の酒樓、飲む一日数次、夜二時及  
 ぶよ二回、席上歌人に新酒藝妓ハ長  
 叙す故也

- 一 新酒の妓女ニ深切也
- 一 一 あり花し内外の別と靴履の別と

立つことありし

- 一 一 あり花し内外の別と靴履の別と
- 一 一 深更あり侍するを云とをす
- 一 一 酒を辭せざるの妓多し
- 一 一 容姿あつても衝氣ありし
- 一 一 纏頭廉らうたり多敷の妓をたす

の便あり

呼吸しん新酒にねふよの留連ゆへを忘る  
 所以らるり、妓の本領格を愛し、女りとすんハ新酒  
 の妝座をいと滑かし

一 十和田湖の風景美を充分看して又さういとすかま  
 い大要ハ日記と考いてある、すて湖の風貌ハ似

もつゝある。松江のレシヨル較べて此十和田湖が  
優る所もあるが、松江のレハ市街が湖舟に臨んじ  
軒をまゝ一種の趣をまゝとある。十和田も七  
の心地がする。十和田湖のレ二大木が突出し  
ある。これが一特徴である。舟を渡して北岸は  
を渡つて探訪すると興味があるが、此の二は  
のレえ切つて湖面を狭く見せる。又、點か  
いもさうい、全編の湖面を平視し得る所も  
ある。わあ、うが、自分の宿に世界公を  
まゝいある。あ、思はん。うら、但し舟を  
渡して、或する、巖脚の、屈折し  
ておの、う、湾をまゝ所を見る。と、お、観、摸、る、

と、清、七、云、の、ぬ、扱、が、あ、る、お、が、清、集、の、村、木、が  
撫、村、蒼、々、と、い、つ、岩、雨、雷、が、強、い、と、霞、の、ん、に、塔、と、女  
子、の、碓、石、の、北、湖、の、長、し、湖、の、あ、る、ま、あ、ら、う、  
併、し、自、分、の、會、心、の、あ、る、湖、舟、も、も、湖、舟、の  
舟、の、流、の、あ、ら、う、三、四、里、の、間、谿、流、と、あ、ら、う  
レ、三、本、木、に、達、す、る、帯、の、お、ろ、細、く、長、く、樹、の  
閑、々、に、陰、樹、の、境、は、あ、ら、此、の、溪、流、を、塩、系  
の、ま、え、の、如、く、お、岸、深、く、あ、ら、う、お、お、ら、ぬ、  
或、人、と、道、路、と、平、行、し、て、流、ん、目、徑、に、激、湍、を  
ま、ま、と、あ、ら、う、岩、石、が、乱、布、し、ぬ、お、觸、ん、て、元  
沫、と、あ、ら、う、木、樹、の、枝、が、垂、下、お、と、達、し  
て、風、帆、を、助、け、て、お、あ、ら、う、道、の、左、右、の、山、峯、を、

見るといふものあり、瀑布の熱りその所もある。耶  
馬津の傾る奇山巖怪石をみるにけいれきも溪谷に  
の趣も或も上りあり、自動車も走りまわると  
元々とも勿体ない味遊びがあることを感し  
湖ありと嘗ていふ鱈族が絶対に無つた、めんを  
和井内といふ人が鱈其他の卵を放つて長い河  
努力して着め、産を湯煮するまじり  
いま成切を元にとつた、今、潤澤な魚小粒か  
お、和井内が数年の努力を破るゝあつても  
効果があつていふのゝとつて一日帳か湖の  
まつておとを圍うと遠くから運ぶい何物か  
とまゝしてゐるのが眼界に入つ、淨視するとも

鱈の群むあることを確うの敬と云ふといふが  
左もあつていふかある、今、和井内、鱈をこゝろ  
湖上の過業権をめぐるとお、鱈の小さるのを  
カバチのボといふてみる、小海志、今、無限ある  
秋田鱈のその大きさを以て名あるが、氣節が子  
かつた若めゆり大きいのを刃ることか出来あるの  
つた秋田の千秋公園内、二ヶ所ばかり鱈畑が  
あつた、昔、鱈畑を以て四方を圍んでみた、  
鱈の風を産ぶとつて、鱈の直徑を寸  
程の、よのゆか一番大きかつた、大鱈、お、今日比  
地の名物、何れと聞か、まゝ、人釣針を以つて  
ふ、終、鱈いす

○中書後初の御田の公館をゆきて海に遊んで人との  
所を少し、但此文政十七家絶句を得たり、此有家  
花とあるも、予得たり本に山陽系者命の朱批あり、  
今心の評多し、山陽の集雅詩一七と云く論  
史論詩の多し、史記と云く、  
余少頼家不欲典正、為人為任選此書者  
乞前詩為不典、尋常、爪、雲、月、夜、之、竹  
而與此嘉名怪奇之詩蓋其意不欲列  
於此者中の人也  
評し得たり、山陽論詩最後の句に云く  
欲制于籟魚無氣力半生徒被喚詩人  
山陽の志以つて記すべし

熾葛藤と号する一書を得たり、吾後後出雲崎の  
香積山の傍古範禪師の文政の年、淨賦を慕り伊松  
松茂、花徑を購ふことを録し、予もその途中の志  
剛毅の文人の送符を多く収め、又三四の回あり、送  
符の心家より、贈志、良、秀、徳、龍、玄、持、聖、四、茅  
あり、巻の扉の首尾に花徑巻首の傳像と龍陣  
の図を撰刻す、古時花徑を購ふを一山の大家と  
いふことを見ふべし、松茂の公館に五十金を投し  
て花徑を得たり、喜びを叙するの文に云く  
無恙入松茂府書肆、合家喜甚、即、余、先、出、上、案  
中金典主人、余、也、粗、性、貪、禿、今、行、持、金、盡  
夜恐久故、喜、而、賦

跋山海入書林 卸却腰纏五十金 似脱龍  
頭離角馱 可憐貧衲得安心  
带的五十金を指のくこの流りの不安をばし此  
傳の初亦北紙文献の資料なるん

大正十四年七月念二記

○秋田：海の日余が隠居の山陽喧傳く山陽の多  
く汝題に上る校及本良要松北海下の富貴也  
山陽の毛物物事を花すとて芝き一説を流す其  
家南秋四郡金足村をわうと頼めん元字りても  
能り余之れを遺傳し、此の旨を在るも次  
野んことを囑しん去る也東の後言し別々皆

八川縁をのりえと書しつもの也八川縁を秋  
田の大えまを京河に在りし日山陽と交の詩  
をえまゝ宛る就交ありしが如し、此中一劍菱  
の酒秋田米を以て必るとある一魚一草外杏  
ほの書幅あり、いんち八川とお関せり

粉壘お映帶渺渺 浪集港上排る所  
難便低昂固乃痛 敬手跣賣豎頼有  
此准因信理失肯改案 每使人主室拊  
辭 聞君職司在根抵 今汝内外如種  
象虫改開招士肉如堆 滿城文墨皆足和  
研 硯の流也目不昧 友役如茶甘如薺  
吾亦一見知惶悌 同舟終夜杯數洗狂

该不精相觸抵，路行未必以時體。送  
君空手濺漣然，漢重信愛津。猶可復  
後，別後每飲伊丹醴。憶起是釀秋田  
米

以川子以將歸，共滿去亦足。言余亦  
西行，發輒已迫，挑糗才二十款。  
塞責詩，雖硬率，語以肝鬲，  
不的或有取焉。 賴襄

鴨河月里，水勢長，由安河亭，小奉觴。  
寸人階，故人語罷，一枕以夜，茫茫。  
詩用文，語易，墜村俗，綠堂再思，有

憶得 年夏添潤，不然的又是中秋。  
之句，雅似白，別所，綠香胸，無底魚。  
宋唯存文，政丁亥七月十四日，余眼  
無書，安無汝，湯准有三樹村，是則  
同 山陽外史 襄

瓜孰如君，歸意忙，洋分太，我別愁長。  
叙懃，綠鴨河，返月，休夜，扣吧，永異心。  
七月十四日，綠香共飲，用其七夕行  
韻起，尚小石元瑞所唱也。 襄

匝年後，役盡少，謝輟征，報過我家。

向個東軒姑後帶、階前桂樹恰開花  
已丑重陽前二日、以川子為東還、余  
次百忙中、肯來也、賦此、此并、公  
寧、豆以為、初、九、 賴、重、心

此等の詩を讀み、縁中、漢の為人、大改、米、糜、  
を、持、さ、る、と、え、祇、後、迎、年、う、う、し、こ、と、其、の、時、の、文、云  
丁、亥、る、こ、と、二、三、回、縁、中、山、陽、の、居、を、訪、ひ、し、こ、と  
小、元、瑞、日、席、の、ま、ま、と、お、ゆ、あ、り、此、等、の、詩  
山、易、の、集、中、の、あ、ま、や、あ、ま、や、他、の、就、こ、之、れ、と、駭  
ん、と、す、

杏、研、久、也、之、八、分、リ、ト、固、係、ナ、シ

西歸後恭上

日野、重、相、公、平、清、其、所、賜

尊、押、恐、悚、之、至

王、化、洪、治、自、邇、淨、潢、池、を、浪、弄、寸、兵、  
如、日、耕、小、夷、多、暇、日、擬、尋、遠、徑、遊、上、京、  
東、山、西、峽、相、追、隨、花、下、月、前、醉、帽、傾、



誰宿<sup>廿三</sup>詞達<sup>廿四</sup>華屋，何料黃鍾識<sup>廿五</sup>賤衣。  
非獨過時<sup>廿六</sup>漆玉<sup>廿七</sup>筆，侍<sup>廿八</sup>燕<sup>廿九</sup>且<sup>三十</sup>甘<sup>卅一</sup>雨<sup>卅二</sup>路<sup>卅三</sup>呈<sup>卅四</sup>雲。  
叨<sup>卅五</sup>果<sup>卅六</sup>不<sup>卅七</sup>覺<sup>卅八</sup>更<sup>卅九</sup>漏<sup>四十</sup>移，<sup>四十一</sup>舉<sup>四十二</sup>頭<sup>四十三</sup>官<sup>四十四</sup>所<sup>四十五</sup>曉<sup>四十六</sup>多<sup>四十七</sup>橫。  
賜<sup>四十八</sup>以<sup>四十九</sup>頑<sup>五十</sup>老<sup>五十一</sup>後<sup>五十二</sup>禮<sup>五十三</sup>數，<sup>五十四</sup>銀<sup>五十五</sup>燭<sup>五十六</sup>錦<sup>五十七</sup>箋<sup>五十八</sup>漫<sup>五十九</sup>揮<sup>六十</sup>掃。  
得<sup>六十一</sup>雨<sup>六十二</sup>法<sup>六十三</sup>佳<sup>六十四</sup>醞<sup>六十五</sup>甚<sup>六十六</sup>茗<sup>六十七</sup>芽，<sup>六十八</sup>春<sup>六十九</sup>蚓<sup>七十</sup>信<sup>七十一</sup>筆<sup>七十二</sup>更<sup>七十三</sup>潦<sup>七十四</sup>倒。  
西<sup>七十五</sup>歸<sup>七十六</sup>依<sup>七十七</sup>舊<sup>七十八</sup>勸<sup>七十九</sup>粵<sup>八十</sup>桑，<sup>八十一</sup>空<sup>八十二</sup>谷<sup>八十三</sup>花<sup>八十四</sup>伴<sup>八十五</sup>誰<sup>八十六</sup>故<sup>八十七</sup>甘<sup>八十八</sup>早。



放<sup>一</sup>犢<sup>二</sup>歸<sup>三</sup>入<sup>四</sup>野<sup>五</sup>鹿<sup>六</sup>鳴<sup>七</sup>，<sup>八</sup>村<sup>九</sup>舍<sup>十</sup>寒<sup>十一</sup>砧<sup>十二</sup>悲<sup>十三</sup>夜<sup>十四</sup>持<sup>十五</sup>。  
此<sup>十六</sup>時<sup>十七</sup>不<sup>十八</sup>眠<sup>十九</sup>思<sup>二十</sup>想<sup>廿一</sup>車<sup>廿二</sup>轂<sup>廿三</sup>，<sup>廿四</sup>幾<sup>廿五</sup>回<sup>廿六</sup>起<sup>廿七</sup>坐<sup>廿八</sup>望<sup>廿九</sup>東<sup>三十</sup>白<sup>卅一</sup>草。

誰<sup>卅二</sup>故<sup>卅三</sup>草<sup>卅四</sup>全<sup>卅五</sup>于<sup>卅六</sup>安<sup>卅七</sup>執<sup>卅八</sup>那<sup>卅九</sup>山<sup>四十</sup>谷<sup>四十一</sup>開<sup>四十二</sup>花<sup>四十三</sup>葉<sup>四十四</sup>似<sup>四十五</sup>燕<sup>四十六</sup>子<sup>四十七</sup>花<sup>四十八</sup>。  
而<sup>四十九</sup>小<sup>五十</sup>高<sup>五十一</sup>僅<sup>五十二</sup>三<sup>五十三</sup>四<sup>五十四</sup>寸<sup>五十五</sup>廿<sup>五十六</sup>膝<sup>五十七</sup>原<sup>五十八</sup>為<sup>五十九</sup>氣<sup>六十</sup>朝<sup>六十一</sup>臣<sup>六十二</sup>讀<sup>六十三</sup>石<sup>六十四</sup>本<sup>六十五</sup>郎<sup>六十六</sup>。  
一<sup>六十七</sup>日<sup>六十八</sup>出<sup>六十九</sup>見<sup>七十</sup>此<sup>七十一</sup>花<sup>七十二</sup>日<sup>七十三</sup>誰<sup>七十四</sup>故<sup>七十五</sup>著<sup>七十六</sup>如<sup>七十七</sup>此<sup>七十八</sup>花<sup>七十九</sup>土<sup>八十</sup>人<sup>八十一</sup>呼<sup>八十二</sup>名<sup>八十三</sup>誰<sup>八十四</sup>。  
故<sup>八十五</sup>詩<sup>八十六</sup>。

安<sup>一</sup>藝<sup>二</sup>賴<sup>三</sup>惟<sup>四</sup>牙<sup>五</sup>碩<sup>六</sup>首<sup>七</sup>揮<sup>八</sup>具







